

情報化と匿名性

是永 論

1 情報化と匿名性 「いたずら電話」を発端として

現代において、いわゆる「いたずら電話」や「迷惑電話」といったものに全く出会ったことのない人は、おそらくほとんどいないのではないだろうか。相手が全く話して来なかったり、見知らぬ相手から口汚い言葉を浴びせられたり、あるいは強制的に物を買わされそうになったり、といった経験は筆者においても一回きりのことではない。NTTの調べによると、いたずら電話の被害について相談をしてくる人は年間ざっと10万件にのぼっている。これは加入者全体に対する比率から言えば1%に満たない数字ではあるが、後にも触れるようにこれはあくまで被害が深刻なために、何らかの具体的な対策をとるまでにいったた人の数であり、実際からすると氷山の一角に過ぎないと考えられる。

このような「いたずら電話」の日常化の背景に、電話の大衆化があることがまず指摘できる。電話の一般家庭への普及は1970年代に急速に拡大しており、住宅用電話の加入数は1965年には180万だったのに対し、70年には680万台になり、80年には2000万台と激増し、加入総数に対する割合も70%になっている。これと期を同じくして迷惑電話が1970年代に社会問題化しており、この流れを受けて郵政省電気通信監理官室では、すでに1978年に首都圏の住民を対象に被害の実態調査を行っており、1980年には「迷惑電話対策研究会議」という諮問機関を通じて、迷惑電話に対する法的規制を提言している。総理府が1988年におこなった調査によると、電話についての困惑内容として、「いたずら電話がある」を挙げた人は全体の25%であるが、東京では43%と半数近くの数値になっている（郵政省、1983）。つまり、「いたずら電話」とは、情報システムの拡大と、機器の家庭への普及という、まさに情報化の進行において顕著になった現象として見る事ができる。

この「いたずら電話」を端緒として情報化の問題を考える場合、いくつかの視点を想定することができるであろう。

一つは情報化自体がもつ危険性・弊害の問題である。具体的には、情報システムの混乱や、それに伴うノイズとしての情報の氾濫といったことが考えられる。過度の情報化は、個人にとって望ましくない、あるいは害悪を及ぼす情報をももたらしてしまうという可能性を常にはらんでいる。災害時に電話の輻輳が救助活動の妨げになるといった例は、非常時において情報化がもたらす混乱であるのに対し、いたずら電話のような例は、日常的な混乱を表わすものとして見る事ができる。しばしば個人情報の流失などとして指摘されるプライバシーの侵害も、情報化の進行による個人の私的な生活領域の混乱として考えれば、これに関連してくるであろう。

第二に、犯罪の高度化・ハイテク化としての問題がある。これは情報化自体に問題があるというよりも、情報化の悪用というレベルで考えられる。ハイテク化といっても、カー

本稿は所収論文の元となったもので、内容が異なります。参照される場合はご注意ください。

ド犯罪などに見られる金銭情報の操作から、電話による詐欺・強制販売といったものまで、情報化の関わり方もさまざまなレベルに渡っている。コンピュータシステムに違法にアクセスするハッカーと呼ばれるものも、こうした犯罪に関わっている例が少なくない。いたずら電話は、その犯罪のごく初歩的な形態であると見なせるだろう。

上記の二つの視点からの検討は従来からしばしば行なわれてきたことであり、むしろ情報化の短所だけを考える目的についてはそれらのアプローチが最も適当であるかも知れない。本論も一方ではそれを目的としているが、さらに広い視点から「いたずら電話」が情報化に関してもっている意味を考えてみたい。それは、「いたずら電話」がほとんどの場合、本人社会的属性が明らかでない、いわゆる匿名の状態で行なわれているということにある。

従来の社会心理学を中心とした知見から、人は匿名の状態に代表されるような、集団の中で個人の特定が難しい状態において、攻撃的・反社会的行動を行なう傾向が指摘されている。例えば、ジンバルドは実験を模した状態で、実験の失敗をしたものに電気ショックを与える役割を、名前などで本人の特定が可能な群と、覆面の上名前を伏せることで本人の特定が不可能な群に分けて与え、両者がショックを与える回数や持続時間を比較した。その結果、ショックを与える持続時間は、本人の特定が不可能な群の方で長くなり（特定可能な場合の2倍）、好ましい相手でもショックを与えることが明らかになったという（Zimbardo, 1970）。このように、自分に責任が特定されない状況で人はむしろ普通では異常と思われるような行動をとることがある。「赤信号みんなで渡れば怖くない」といったように、私たちが集団で逸脱した行動をとったりするのも、こうした原理に基づくと考えられる。

情報化にともなうメディアコミュニケーションの進展は、こうした匿名の状況をより簡易に作りだすことになる。匿名の状態と攻撃行動の関係について後で詳しく検討するが、ここから、情報化がもたらす匿名性と、情報化のもつ危険性および犯罪化との結びつきが仮定できる。しかし、匿名の状態というものは、その例とはなるが、必ずしも逸脱・攻撃といった非日常的な行動ばかりを導くものではないし、匿名であるということは、必ずしも非日常的で特別な状態であるわけではない。

むしろ、特に人々が都市へ集住するようになった今世紀の初頭から、不特定多数の人々によって匿名のコミュニケーションが行なわれる機会と、その日常的な影響は大きく広がっている。その匿名のコミュニケーションの形態には、大きく見て二つの分類の仕方があると考えられる。

一つはマクロな形での集合行動であり、盛り場や駅に見られるような通行での人の流れ・行列といったものがその典型となる。こうした集合行動には、集会やデモのように目的を明確にして行なわれるものもあるが、暴動やパニックのように無目的のまま突発的に生じるものもある。そこでは、コミュニケーションに参加するものは、ほとんどの場合多対多の関係にあり、したがって、コミュニケーションにともなう行動のコントロールは、特定の人に負うところは少なく、常に集合的である。

本稿は所収論文の元となったもので、内容が異なります。参照される場合はご注意ください。

そしてもう一方には、ミクロな形での、局域行動とも呼ぶべきものがある。これは、通勤電車の車内やエレベーターのように、場所が比較的小さい空間的に限られており、コミュニケーションに参加する人数もある程度一定しているものである。しかし、参加するものにとって、そのコミュニケーション自体について明確な目的はなく、むしろその場に居合わせることをきっかけに進行することが多い。それゆえに参加者は不特定多数であり、全員がお互いに匿名である場合も少なくない。前者の集合行動との大きな違いは、コミュニケーションへの参加が不特定の人によって任意に行なわれながらも、一対一の関係が生じる場合が多いことにある。車内で居合わせた人どうしが世間話を始めたりする行動がその典型であるが、この場合、コミュニケーションにともなう行動のコントロールは、その場面にいる特定の人に負うところが多い。

これらの匿名のコミュニケーションに対して影響を与える要因は、都市の形態や交通の発達、あるいは人口の流動など、さまざまなものがあるが、その一つとして情報化が重要な位置を占めているのは言うまでもない。さらにそれらのコミュニケーションと情報化との関係についてもまた、その形態にしたがって二種類があると考えられる(表4 - 1参照)。

表4 - 1 匿名のコミュニケーションとその情報化

種類	対面状況の例	参加形態	情報化の形態例
集合行動	街頭の行列	多対多	テレビ中継
	講演・コンサート	(大規模)	新聞記事
	デモ	一対多	ラジオ中継
	暴動		予約などのテレフォンサービス
			電子掲示板
局域行動	乗り物内での会話	一対一	駅などの伝言板
	パーティーでの談話	一対多	新聞・雑誌の投稿欄
	酒場での会話	多対多	テレビ・ラジオ番組への投稿・電話
		(小規模)	パーソナル無線
			伝言ダイヤル
			パソコン通信フォーラム

前者の集合行動の情報化とは、従来その多くがマスコミュニケーションという形で考えられてきたものである。しかしここでは、マスコミュニケーションにおける匿名性について詳しく触れる余裕はないので、その特徴について簡単に述べると、それは、一方(受け手)が他方(送り手)に対して匿名であるが、他方が一方に対して匿名でない(有名であ

る)という、一方向的な匿名性が成立しているということにある。このために、マスコミュニケーションは基本的に受け手と送り手の間で、多対多あるいは多対一の関係として成立していると言える。しかしながら、マスコミュニケーションが対一関係を成立させることができないというのではなく、例えば投書欄や番組への投稿などの形で、対一関係がとり結ばれることも多い。しかし、そうした関係の個別性は、必ずマスとしての受け手を介する意味で本来は個別なものではなく、一方によって相手を疑似的に特定した形で(パラ・ソーシャルに)作り出されるものである。

これに対し、後者の局域行動の情報化は、従来それ自体が情報化の対象として考察されることが少なかった。それは、単にそのような形式をもったメディアが存在しなかったというだけでなく、あるメディアに見られる特定の形式というものが、当初から備っているものではなく、社会の中でさまざまな可能性の追求を経た上で、初めて生成されるからである。例えば、電話は、現在でこそ対一の形式でコミュニケーションが行なわれるのが普通であるが、その発生当初はラジオのような使われ方も多く行なわれており、任意の人々を対一関係で結ぶ匿名のメディアとしての利用は、交換機を介して無限に相互接続されるシステムの成立によって初めて可能になったものである(吉見ほか, 1992)。

現在、いくつかのメディアにおいて結ばれている、不特定の人々による匿名での局域的な関係もまた、近年における社会的な生成の結果、ようやくと成立しつつあるものである。それには、産業化による制度的な基盤の整備と、人々におけるニーズの拡大が必要であったが、これらは1980年代も後半になって生じたものである。両者をつなぐ接点となった社会的な動きとして、次の二つを上げることができるであろう。

一つは、メディアのネットワーク化という現象である。この現象を代表するものとして、いずれも80年代を中心に発生した、パソコン通信、伝言ダイヤル(パーティーライン)、無線(パーソナル無線、ポケットベル)の三つを上げることができるであろう。これらはいずれも、当初は職場の同僚といった特定の相手とのコミュニケーションのために構築されたものであるが、その発生からしばらくして、単なる仲間うちでの通信手段から、次第に見知らぬ人々を結ぶネットワークメディアとして機能するようになっていった。また、一方で見知らぬ人々によるネットワークの形成は既存のマスコミュニケーションを媒介としながら進行していった。電話やファックス、ビデオカメラといったメディアによる受け手からのマスコミへの情報発信によって、より広範囲での即時的な情報の交換が可能になり、マスコミを核とした一つの情報ネットワークが形成されたのである。マスコミの側でもまた、「くちコミ」に代表される受け手のネットワークにおける情報を基盤におく傾向を強めることで、間接的にこうした動きを促進していったと考えられる。

これに対し、同じ時期に家庭や企業組織といった既存の枠組みを越えて、ネットワークを形成するニーズが人々の間で高まっていった。それは、家庭や組織自体のヨコのつながりの拡大を意味するだけでなく、組織内部でのタテのつながり自体を流動化させるものでもあった。特に1980年代の後半においては、「ネットワーク」は一つのキーワードとなっ

て、主婦のネットワークづくり、企業組織内外でのネットワーク化、地域社会のネットワーク化が、既存の組織によらない、新しい形式で行なわれていった（佐藤, 1988; 今井・金子, 1988; 金子, 1986; ）。

以上のような動きの中心に現れたメディアの特徴を敢えてまとめるならば、「電子メディア」と呼ぶのが一般的であろう。それは、すなわち、電子的なテクノロジーに媒介された、双方向的で、時間や空間のコントロールが自由なコミュニケーションを可能にするものである。しかし、繰り返すように、これらのメディアは電子メディアであるから、匿名での局域的なコミュニケーションを可能にしたというより、匿名での局域的なコミュニケーションが、さまざまな過程を通じて変容をたどった結果、これらのメディアの上に可能性を見出したという方が適当であろう。

「いたずら電話」とは、非常に偶然的なものであるが、電話というメディアが、大衆化の中で、不特定の人との局域的なコミュニケーションの可能性を出現させていった一つの例を示すものと考えられる。しかしそこから同時に、何らかの制度的基盤と一般的なニーズを持たなければ、そうしたコミュニケーションは社会的には単なる「いたずら」に過ぎないことも示される。先に示した電子メディアについても、匿名の人々どうしの新しいコミュニケーションが形成される一方で、性的なコミュニケーションや暴力的なコミュニケーションといった傾向が強いと言われており、日常的に行なわれるコミュニケーションであるとは必ずしも言い難い。これらの傾向をひとまず電子メディアコミュニケーションのもつ「逸脱性」として仮定しつつ、メディアであるためにこのような傾向が助長されるという因果関係について検討する必要があるであろう。

しかし、その反面、これらのコミュニケーションがもつ「逸脱性」を強調するあまり、上記のような社会的な動きの中で生成されてきた、これらのメディアがもつ可能性を見失う危険がある。仮に「逸脱性」をはらむとしても、実際にそれらを使いこなして円滑なコミュニケーションを行なっている人々は、それらを回避しつつ実際にコミュニケーションを行なっているのであり、そうしたコミュニケーションのあり方を知ることは、情報化の問題への対応を探るという意味でも重要であると考えられる。

以上から、本章では、不特定の人々による匿名での局域的なコミュニケーションが、どのように情報化の過程に取り込まれつつあるのか、その可能性について考察することを第一の目的としている。その中で、なぜ電子メディアがその可能性が展開する場所となり、またそれが、メディアの特性とどのような構造をもって関係しているか、についても考えていきたい。そこに、情報化もつ社会的意義の一端を見ることができよう。

そのために以降では、まずゴッフマンによる対面状況での匿名の局域行動に関する知見をもとに、匿名性の定義について検討すると同時に、「匿名であること」の意味を、対面コミュニケーションという状況での特性に照らして考える。次に、上記のメディアを中心に、そこでどのような匿名のコミュニケーションが行なわれているかについて概観しながら、メディアコミュニケーションと匿名性の関係について、メディアの特性上の比較を交えて

本稿は所収論文の元となったもので、内容が異なります。参照される場合はご注意ください。

検討する。そこからさらに、メディアコミュニケーションにおける匿名性の文化的な意味について考える。最後に、以上を総括する意味で、匿名のコミュニケーションが情報化との関わりの中でどのように変化し、その中でコミュニケーションの主体がいかなる変容を迎えているかについて結論づけたい。

2 匿名性の諸相

2.1 匿名性の定義

当初においては、匿名性を、相手に関する属性の欠落として便宜的に定義したが、一口に相手に関する「属性」の喪失といっても、視覚、聴覚といった感覚に依存する情報によるものから、相手に関する社会的な情報によるものまで、様々なレベルがある。

このような、コミュニケーションにおける相手の存在を、さまざまな種類の情報が統合された一つの集合体として見る考え方は、既存の匿名性に関する概念において、多く見られている。この代表として、ミルグラムの「匿名性の連続体」という概念が挙げられる。それは、人はコミュニケーションにおいて、一方に「完全な匿名」という極をもち、他方に「完全な知己」という極をもつ一つの連続体の間に相手を位置付けながらコミュニケーションを行なう、というものである。コミュニケーションのスタイルや内容は、常にこの連続体における相手の位置に応じて選択されていく (Milgram, 1970)。

こうした連続体のあり方を理解するのに、「生活誌」(ゴッフマン)という概念がある意味で有効だろう。それは例えば、人は各自一冊の白いノートのようなものを持っており、それぞれの生活の営みにおいて自分が果たしている諸役割の軌跡を、そのノートに書き込むことで、一つの生活誌というものを綴っている、という考え方である。(Goffman, 1963a; 小川, 1979;) コミュニケーションが行なわれる場合の匿名性とは、互いが相手の生活誌の内容についてどれだけ知っているか(知らないか)という程度を示すものとして、考えることができるであろう。自己が自己について綴る生活誌において、そこに綴られる情報は、互いに連鎖しており、またその連鎖の仕方は、一つしかあり得ない。その単一性において、個人の持つ情報というものは、程度として考えられ、概念的に一次元のものとして構成される。

しかし、この「生活誌」の情報としての単一性は、あくまで自己が自己について綴る場合にのみ成立するものであって、自己が他者に、他者が自己について綴る場合、そこで個人的アイデンティティと、社会的アイデンティティという、情報の種類が問題となってくる。社会的アイデンティティとは、職業や社会的地位・役割といった、社会的な場面において決定される、人のカテゴリー・属性であり、個人的アイデンティティとは、社会的な場面以外において決定されているその人の性質である、とひとまず定義できる。血液型を例にすると、「O型の人は単純な性格だ」と社会的な通念として言われる場合の、「O型」

本稿は所収論文の元となったもので、内容が異なります。参照される場合はご注意ください。

とか「単純な性格」といったものが、社会的アイデンティティであり、実際に「是永論」といった人物が「O型」であり、「単純な性格」である場合に、それらは個人的アイデンティティとなる。AがBにとって匿名であるとき、BがAが「どういう人物」であるかを、「血液型」によって類推することが普通に行なわれるように、個人的なアイデンティティを社会的なアイデンティティによって構成したり、個人的なアイデンティティとして得た情報を、社会的なアイデンティティによって整理したりするなど、両者は相互的な関係をもっている。

ここで重要なのは、この二種類の情報は、質的に異なっており、その相互的な関係は、一方が増加すれば、他方が増加するという単純な関係にない、ということである。第一に、個人的アイデンティティは先に述べたように単一性を保っているが、社会的アイデンティティは、社会的な場面の経験 家庭、職場、街路など それぞれにおいて、多様性を保っている。第二に、個人的なアイデンティティにおける情報の連鎖の仕方と、社会的なアイデンティティにおける情報の連鎖の仕方は、それぞれ別の基準によって構造化されている。Aが「O型」であることから、BがAを「単純だ」と判断するとき、それは社会的な通念としての「血液型は性格を表わす」といった基準によって判断しているのであって、実際にAが「O型」かつ「単純な性格」である、ということは、例えばABO式の血液型が全く採用されていない社会でも可能であるが、その社会では、そのような連鎖づけは全く意味を持たないことになる。しかし、個人的アイデンティティは、その人の生の軌跡としての「生活誌」の蓄積がある以上、その連鎖性の根拠については、問いようがない。

したがって、特定の社会的場面においてコミュニケーションが行なわれる場合、そこでの情報のあり方（例えば匿名性の保持といった）は、しばしば、相手が発する情報の量の問題としてではなく、個人的なアイデンティティと社会的なアイデンティティ¹⁾という二つの情報の質的な違いの問題として経験されることになる。いくら少ない情報が提示されたとしても、一つの社会的なアイデンティティの提示だけで行動が成立することもあるし、逆に相手がいくら社会的なアイデンティティに関する情報を積み重ねたとしても、個人的なアイデンティティには何の影響も与えない場合（タレントや有名人の例）もある。

したがって、いかに親密であり、相手の個人的なアイデンティティに関する情報を知りえたとしても、そこにはカテゴリーとしての行為や性質に関しての、「社会的に標準化した期待」があり、「未知の人と交渉をもとうと親密な人と交渉をもとうと、この交渉関係には社会の指先が無遠慮にふれて」(Goffman, 1963a, p.90) いることになる。逆に、単に匿名の状況であるといっても、それは多くの場合個人的アイデンティティとして「生活誌」的に匿名なのであって、通常「社会的アイデンティティに関して完全な匿名というようなことはほとんどあり得ない」(Goffman, 1963a, p.112) のである。以下は、匿名であることの意味を明確にするため、個人的アイデンティティとして「生活誌」が綴られていない場合を特に「匿名」と呼ぶ。

さらに、そこから問題となるのは、このような「匿名」でのコミュニケーションにおけ

本稿は所収論文の元となったもので、内容が異なります。参照される場合はご注意ください。

る、個人的アイデンティティと社会的アイデンティティの乖離であり、特にそのような乖離が生じている状況においての、個人による状況のマネジメントが、いかにして行なわれているか、という点である。以上の考察過程は、ゴッフマンによる次のような言葉としてまとめられるだろう。

「一方の極に十把一からげの秘匿的扱いがあり、他方の極に個別的各自的公開的扱いのある関係の連続体を考える代わりに、そこで接触が生起し、安定化するさまざまな構造 街路と未知の人々、...家庭内 を考え、それぞれの場合に見せかけの社会的アイデンティティと実際の社会的アイデンティティの乖離が生ずる傾向があり、状況进行处理するためにそれぞれに固有の仕方で努力が払われると見るのが適切であろう」(Goffman, 1963a, p.93)

2.2. 対面コミュニケーションとしての匿名性

前節では、「匿名性」を単純に既存の概念から考察したが、それらの概念には、一定の社会的な背景があることを指摘しておかなければならない。それは、こうした「匿名性」が、対面のコミュニケーションで、しかも都市空間という場合において成立しているということである。「匿名性」とは、あらゆるコミュニケーション状況に普遍的なものではなく、むしろこうした固有の文化的背景として、コミュニケーションの参加者により、一つの状況として処理される限りにおいて問題となるものである。したがって、あらゆる形態のコミュニケーションにおいて、共通した「匿名性」のあり方が存在するのではなく、それぞれの状況で、それぞれのやり方で処理される「匿名性」を考える必要があるだろう。

ここでは、都市空間における公共の場で見られるような「匿名性」について、文化的な慣習（プラクティス）として遂行されている側面に注目し、その特徴のいくつかについて見た上で、メディアコミュニケーションに対し、それらを適用する可能性について検討したい。

都市空間で見られる「匿名性」が、都市の大量人口と密接な関係にあることは、まず前提として指摘されることである。ロフランドは、この都市的な特性と結び付けて、「ストレンジャー（匿名）の世界」が成立する条件を、(a)人間の認知能力の生物的限界、(b)分業によるコミュニケーションの構造化、(c)ある時点でその場に居合わせている人の限定性、の三つを挙げている（永井，1986）が、都市化の結果むしろ人々の意識として「匿名性」は非常に自明的（あたりまえ）なものになっており、このような背景のもとでの特殊性をあらためて念頭におく必要があるだろう。

さて、そのような条件のもとで、生起するコミュニケーションには、一定の秩序が存在する。その一つである満員電車という状況を例に、薄井は、その秩序の存在を、状況における位置の相互承認、相互の距離の保持、行為者自身の自己コントロールという三点にまとめて指摘している（薄井，1991，pp.162，164）。は、状況への参加者

が、その状況外で占めている社会的地位を無視できるものとした上で、状況内に形式的に対等な「人」としての位置を割り振ることであり、これは、たとえ重役といった社会的に高い地位にある人でも、その状況内では、無言で人を押し退けたりすることが許されない、という例で確認できる。は、状況の参加者が、それぞれの「ナワバリ」を設定・維持することを意味するが、それは、相手の体にむやみに近づいたり、接触してはいけないといった、物理的な空間だけに関わるものではなく、相手をジロジロ見たり、ニヤニヤ笑いかけようような行動が許されないように、相手に関して得られる情報の領域に対しても当てはまる。は、その状況に対する適切さを意識して自己の振る舞いをコントロールすることで、これは、その状況内で、突然なんの理由もなく奇声を発したり、笑い出したりすることが許されないことによって確かめられる。

以上の行動によって、人々が何をしているのか、と言え、それは状況において、それぞれの人が「人」としての自己イメージ(フェイス)を保っているのである。このような状況において保たれるフェイス2)を、ここでは薄井にならい「市民的自己」と呼ぼう。しかしながら、以上のルールに反する例が、かなり日常的に経験できるように、これらの「市民的自己」としてのフェイスは非常に弱くもろいものである。それゆえに、これらのフェイスは、お互いに対して積極的に「働きかけない」ことによって成立するという、大きな特徴をもっている。以上のような違反に対し、「やめてください」という「働きかけ」をするのは、しばしば個人の勇気の問題として語られるが、そういった行為に出ることを規制しているのは、そのような個人的な問題ではなく、行為自体が相手のフェイスをつぶすことになり、そのフェイスをつぶしたということそれ自体によって、「働きかけ」をした側のフェイスもつぶれるという、行動の相互的な構造による。結果として、そのような違反に対し、人は相手に「働きかけない」、少なくとも「働きかけない」ふりをすることによって対処する。例えば、相手がこちらをジロジロ見ていたら、相手が見えないような距離に移動したり、あるいは実際は見えていても、大げさに首を横に向けたりすることで、自分は「関係がない」ふりをして、その違反を回避する。

後の議論にも関連することであるが、これらのコミュニケーションの前提となっているのは、人と人が居合わせていること、すなわち(非言語的な)身体の一部がコミュニケーションの媒体となっているという条件である。ゴッフマンはこの事実を重視しており、その身体によってのみ遂行されるコミュニケーションを「焦点の定まらない(unfocused)相互作用」、人々が近接して、話をするなどして注意を単一の焦点に維持する場合のコミュニケーションを、「焦点の定まった(focused)相互作用」と呼んで区別した上で、それぞれの相互作用秩序について考察している(Goffman, 1963b, p.27)。そのため、それらの相互作用秩序においては、しばしば視覚的なキューの存在が重要視されており、むしろそれ自体がこうした「匿名」状況の特殊性として考えられがちである。

しかし、ゴッフマンが問題としているのは、身体的(非言語的)働きかけ=相手への「働きかけ」が低い、言語的働きかけ=相手への「働きかけ」が強いという単純な二項対立の

上での、一方の優位ではなく、あくまで、相手に「働きかけること＝接近」と、「働きかけないこと＝回避」を同時に行なうという両者のバランスである。このバランスが崩れた時、コミュニケーションは危機をむかえる。むしろ、「匿名」状況は、相手への「働きかけ」それ自体の弱さよりも、「市民的自己」としての両者のバランスの弱さと、それだけに様々なコミュニケーション・キューによって周到に接近と回避が行なわれる、その技術的な形態の特殊性として、問題となると考えられる。さらにゴッフマンは、フェイスを保つための行為（フェイス・ワーク）を回避的なものと呈示的なものに区別して、前者に関しては、相手のプライバシーに深く立ち入らないための行為（相手の失敗や欠点を見ないふりをする）、後者に関しては、相手への敬意を表わす行為（あいさつ、賞賛、サービス）があることを指摘した上で、両者に内在的な対立があることを示している³⁾。例えば、相手の健康を気づかうことは、相手への共感を示すと同時に、相手のプライバシーを侵害することにもなりかねない（Goffman, 1967, pp.57,72）。さらに、回避と接触は必ずしもコミュニケーション・キューに固有の意味があるのではなく、例えばエレベーターという狭い空間で、見知らぬ相手と居合わせた時に、相手にとりあえずどうでもいいような話をしたりすることがしばしばあるが、これは、自分の身体による非言語的な接近を、意味のない会話という言語的な回避手段によって、バランスをとっている一つの例であるといえる。

従来、「匿名」のコミュニケーションに対しては、原子化された個人の集合体としての「マス」による、犯罪や反社会的行動といった、行動の無秩序性が強調されていた。そこにある程度の秩序を認めていたとしても、そのような無秩序性を前提とした上での、「安全」の保持のためのコミュニケーションという側面が重視されていたように思われる。

その代表として考えられるのが、「没個人化 (deindividuation)」という概念である。没個人化とは、古来、ル・ボンの考察に代表されるような、騒擾・パニックといった群衆における人間の非理性的・非合理的行動を説明する概念として提唱されたものである。フェスティンガーらは、集団における「匿名」状況が、個人と周囲の人間の違いを失なわせ、その結果、個人内部において自己を統制する意識がなくなり、ふだんでは見られないような攻撃的な行動に移りやすくなる、というものとして本来の没個人化を概念化している（Festinger et al., 1952）。そこには、大衆社会論で見られたような、大衆化による個人の原子化と、それによる規範の喪失と非理性的行動、という図式が見られる。

この概念の問題については、後に詳しく検討するが、しかし、実際にそうした状況に見られるのは、相手の「人」としてフェイスを保つための、極めて秩序的なコミュニケーションであり、それは誰が命令するわけでもなく、相互的な形で自律的に遂行されて行く。しかも、単なる危険の回避といった、回避的な側面だけでなく、むしろ同時にさまざまな形での相互接近を可能にしているのであり、一見秩序を乱すように見える行為がすなわち相手への侵犯になるのではなく、お互いによって、秩序あるものとして構成されていくのである。例えば、満員電車で足を踏まれて、「痛い！」という大声を出してしまった場合、その行為は単独では他の人々に対する侵犯となるが、踏まれた側は笑みを見せたりするこ

本稿は所収論文の元となったもので、内容が異なります。参照される場合はご注意ください。

とで、その「痛い」という言葉が、(その時は本気で言ったとしても)本当に痛いことを意味しないようにし、周りの人々は彼の「痛い」という言葉に対し特に反応を見せないことで、「痛い」という言葉を一定の秩序の中へ組み込んで行くのである。

こうした行為の秩序は、しばしば「相互作用儀礼」と呼ばれるように、個人の意識に関係なく、自明的に行なわれているが、特定の空間といった形で、ある程度目に見える形で制度化されていることも事実である。逆に、その秩序を乱しかねないような相互接近が行なわれる場合、その行動の権利を保証する「開放区」(Goffman, 1963b)が慣習的に存在する。都市の中でも、「盛り場」と呼ばれるところは、そういったコミュニケーションが生起するところとして、慣習的に成立している(吉見, 1988 など)。

「開放区」では、「匿名」であるかどうかに関係なく、お互いに明示的な形でコミュニケーションを開始する権利が与えられる。しかしながら、それらの接近の程度や参加の資格に関しては、社会的・歴史的背景により、様々な違いが見られるのも、事実である。

また、接近の可能性とは、定義にならえば、「生活誌」としての相手のアイデンティティに対するアクセスの可能性と見ることができるであろう。この可能性は、アイデンティティの種類によって大きく異なってくる。先にも述べたように社会的なアイデンティティは視覚的なアクセスによってすでに明らかになるものであり、完全に「匿名」であることは難しく、したがって、アクセスすること自体がすぐに相手への侵犯になるわけではない。これに対し、個人的なアイデンティティに対しては、街に行く人にいきなり年齢を聞くことが非常に不適切であるように、アクセス自体がすぐに侵犯になることが多い。しかし、どちらのアイデンティティに対するアクセスであるかは、あくまで相手とのコミュニケーションによって意味付けられるものである。相手を過剰に見ることは、たとえ社会的なアイデンティティへのアクセスであっても、相手によって個人的なアイデンティティへのアクセスにとられることがある。逆に、相手を必要以上にジロジロ見てしまった場合でも、相手がタバコを吸っていれば、その後で火を貸して下さいと言うか、あるいは目の前の煙をはらう真似をするなどというコミュニケーションを行なうことによって、適切に処理されるように、「喫煙者」という社会的アイデンティティが成立すれば、たとえその人の容姿の美醜(という個人的アイデンティティ)にアクセスしていたとしても、そのアクセスは正当化されるのである。

このように、対面コミュニケーションにおける「匿名性」とは、あくまで相手に対する接近と回避のバランスの中で問題となるものであり、常に一定の形として存在し、人々の行動に影響を与えるものではないことが確かめられる。

3. メディアコミュニケーションにおける匿名性

ここでは、さまざまなメディアを通じて行なわれている「匿名」のコミュニケーション

本稿は所収論文の元となったもので、内容が異なります。参照される場合はご注意ください。

の実態について、以上のようなアイデンティティの維持の問題を中心に見て行く。そこからさらに、それらのコミュニケーションに電子メディアという特性がいかなる形で関わっているかを、特にマスコミュニケーションとの対比から見ていくことにする。

3.1. 電話における匿名のコミュニケーション

(1) いたずら電話

冒頭にも述べたように、いわゆるいたずら電話と呼ばれるものが、われわれにとってはむしろ最も身近な電話による「匿名」のコミュニケーションであるかも知れない。しかしながら、この実態に関しては、被害者に対する調査以外には知る方法がなく、プライバシーの問題もあって利用できるデータが非常に限られている。唯一郵政省が1978年に首都圏の住民(2100世帯)を対象に細部にわたる調査を行っており(「電話の悪用に関する実態調査」, 郵政省電気通信監理官室, 1978年)。以下ではこのデータをもとにその実態について見ることにする。

まず、被害の比率であるが、全世帯の52%が被害にあったと答えており、ほぼ2軒に1軒は何らかの形で迷惑電話に遭遇していると思われる。被害(複数回答)を種類別に見ると、無言電話が37%、セールス・アンケート電話が33%、わいせつ電話が16%と特に高くなっており、以下、カツギ遊び電話、交際強要電話といったものが並んでいるが、これらの比率は3%程度である。被害の連続性については1回きりが半数を占めているが、連続したものも同等の割合を見せている。また、電話の相手については、不明である場合が多いものの、声から類推される限りでは、ほとんどの場合が男性で、特に若いものに集中しており、特定のサブカルチャーとして行なわれている部分大きいと考えられる。

その後、1989年に行なわれたNTTによる調査では、被害にあった比率は77%で、被害内容の割合については、無言電話が58%、セールスが36%、わいせつ電話が26%と、各種類に渡って被害率(複数回答)は上昇している(堀部, 1992)。しかしながら、被害の状況そのものに大きな変化は見られず、データの詳しさを優先して1978年のデータを中心にみていくことにする(図4-1参照)。

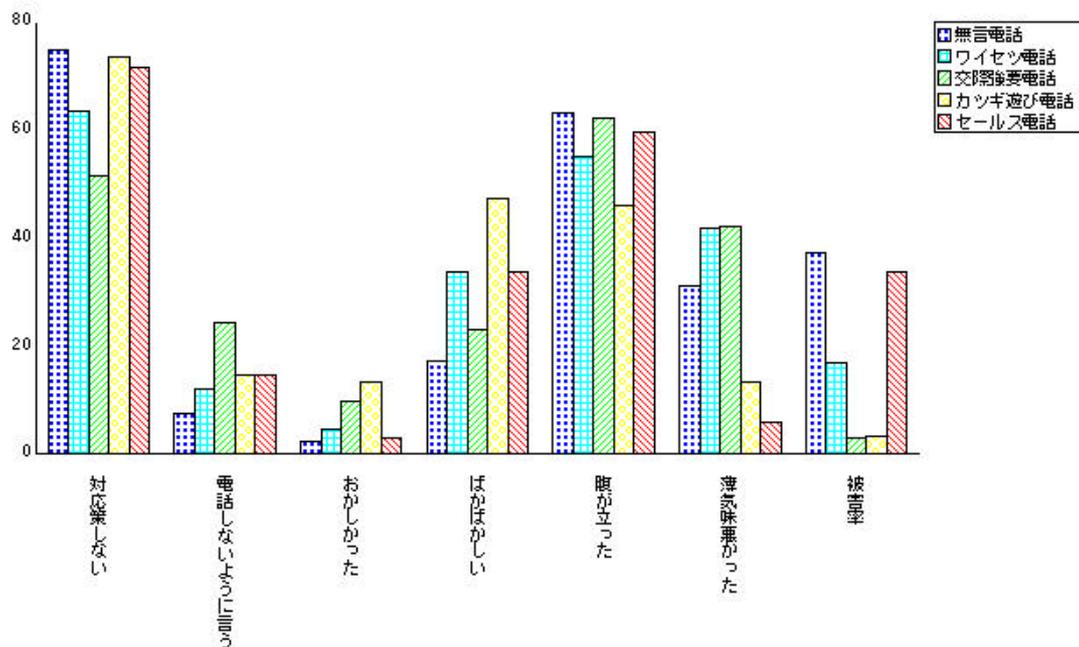
これらの電話のほとんどが、名前を出さない匿名の状態で行なわれているが、特に匿名である場合が多いのが、無言電話・ワイセツ電話であり、これに対し、交際強要電話やセールス電話では、名乗る場合が高くなる。一般に、相手が匿名である場合の被害の方が、被害感は「おかしかった」・「ばかばかしかった」といった軽度のものから、「薄気味悪い」・「恐怖心を覚えた」という重いものになる傾向が認められている。

これに対し、被害者側での対応策としては、特に「対応策をとらない」というものが全体の7割を占めており、最も行なわれる対応策としても「電話をしないようにいう」というもので、1割に過ぎない。

この、いたずら電話のいわば主流である無言電話については、さらに多段的なサンプリ

ングを行なって詳しく見たデータがあり、それによると通話時間は1分以下が圧倒的多数を占め、5秒以下のものがすでに4割となっている。発信者については当然不明な点がほとんどであるが、被害を受けた側でも、特に狙われた（自分を特定してかかってきた）という意識は少なく、連続であっても全く「偶然の」「イタズラ」であるという意識が高い。そのため、全く対策をとらなかったものが、連続の場合でも6割強を占めており、単発の場合では全ての人が対策を「考えもしなかった」と答えている。

図4 - 1 いたずら電話に対する対応策



しかしながら、被害感を5段階で尺度化したものへの回答では、連続の場合、他のいたずら電話に比べて同等の高さを見せており、「逆探知してでも相手をつかまえたい」と答えるものが55%と、他のいたずら電話と比べて、被害を根絶したいという意識は決して低くはない。

以上を総括すると、いたずら電話においては、「匿名性」の高い無言電話がその主流を占めており、被害感もそれだけ高く、被害を根絶したいという意識もあるが、実際の対策としては、相手に注意するレベルでもすでに実行される率は低いという実態が浮かび上がってくる。

ここで問題となるのは、「匿名性」が高い場合に被害感を生じることだけではなく、なぜそのような被害感が高いにもかかわらず、相手に対し何の働きかけもしないか、という点である。これに対し、何らかの名前を名乗っているセールス電話・交際強要電話の場合では、相手に注意する比率が明らかに高くなっており（無言電話で7%に対し、交際強要電話では24%）、こうした矛盾が、「匿名性」に関係していることをうかがわせている。

本稿は所収論文の元となったもので、内容が異なります。参照される場合はご注意ください。

この点については、一方で、相手への恐怖心から、相手との関わり自体を拒否するという説明も考えられる。しかし、被害感の程度と対応策をクロスしたもので、「恐怖心を感じる」場合でも、「相手に電話しないようにいう」比率は他の被害感と同等になっている。したがって、この説明は妥当しにくいであろう。

このような心理上の機制からの観点とは別に、よりコミュニケーション論的な観点から、説明が可能であろう。例えば、西阪は「電話がかかってきたとき、受話器をとったまま、5秒ないし10秒沈黙する」という実験を学生に行なわせた結果について述べている（西阪，1992）。実験を行なった学生は自分たちが「変に思われる」ことを心配（期待）していたが、実際はこのような状況においても、学生が「変に思われる」例はなかったという。相手の反応のほとんどは、「電話の調子が悪いと思った」、「気分が悪いのかと思った」というもので、受け手について、電話でやりとりする能力を疑ったものは一人もいなかった。

このことは、「電話でやりとりする場合は、開始後すぐに声を出さなければならない」というルールが、人々により日常的に保たれているが、そのルールに反することがあっても、その事態はすぐにルールの破綻を意味するのではなく、人々によってある偶発的な場合と判断して処理されることを示している。すなわち、無言電話については、すでに示したように、4割の人々は5秒程度の無言状態をすでに「異常な事態」として見なしているが、それがそのまま相手とのやりとりの場面において、普通には起こり得ない、「犯罪」として成立するのではなく、あくまで、たまたま起こった「よくあるできごと」（偶発的な事態）として処理される傾向を示している。これは、人々が固定観念をもっているために、犯罪として認知されにくいというよりは、よりコミュニケーション的なものとして、受け手の側がそのような事態を、ある「よくあるできごと」として作り上げていることを示している。そこでは、受け手はあくまである電話の「受け手」であり、「犯罪」の「被害者」にはならない。もちろん、この場面において電話をかけている方も、受けている方も、これが普通の電話のやりとりではない、と考えているかも知れない。こうした人々との意図とは無縁に、それがその場面において、はっきりとした「異常な事態」として成立しえないところに、いたずら電話のもつ矛盾が存在すると考えられる。人はその「異常事態」に対し、恐怖心その他によって対応ができないのではなく、むしろ敢えて何の対策もしない、つまり「何もしない」という働きかけを行なうことによって、その事態を何事もなかったことのようにやり過ごしていると考えられる。これは丁度、満員電車の中で「痛い！」と叫んでしまったという違反を人々がやり過ごすという先の例に似ている。その意味では、お互いに言葉を交わさない状態が続き、一見コミュニケーションが行なわれていないようにも見える無言電話という状況も、お互いによって、まさしく暗黙のうちに一つの「よくあるできごと」が作り上げられている、コミュニケーション的に見て極めてアクティブな場面であると見ることができる。無言電話は、いわば、無言という極めて象徴的な意味を持った、（一見異常にも見える）「匿名」性を、人々によって共有され得る一つの「社会的アイデンティティ」として成立させる過程であるとも考えられる。例えば、通常の対面コミュ

本稿は所収論文の元となったもので、内容が異なります。参照される場合はご注意ください。

ニケーションで終始沈黙を保つことは、かなり逸脱した印象を与えるが、それも満員電車といった場面では「よくあるできごと」として構成されている。同様のことを電話で行なったとすれば、それは一見単なるコミュニケーションの破綻、相手からの容赦ない非難を予測させるかも知れない。しかし、人はまたそれでさえも、「よくあるできごと」として組織化してしまう。つまり、そのような状況においてもなお、回線上のいるかどうかもわからない対象を一つの「人」として扱い、相互的なフェイスを保っているのである。

このように、無言という一つの「異常事態」をある「偶発的なできごと」に作り変えることを含めて、人々は電話におけるさまざまな経験の組織化の可能性を広げている。つまり、そのような「異常な」状況を日常的なものに組織化することによって、電話のコミュニケーションが成立する可能性を拡大しているのである。筆者自身の経験としても、筆者が中学生であった1970年代後半の時点で、すでに仲間にあらずら電話をかけて遊ぶようなことは日常化しており、その中で電話でのコミュニケーションという経験を身近なものにしていったおぼえがある。先においては、特に年代による違いについて考えて来なかったが、NTTに寄せられる電話での被害に関する相談件数は、近年減少の一途をたどっており、あらずら電話に関する被害意識は薄れつつあるといわれている。これは、決して発生件数が減っているのではなく、このような電話での被害が「相談するまでもない」ものとして、それだけ日常化されていることを示しているのであろう。

これらの背景に電話の大衆化があることはすでに指摘した通りであるが、こうした一連の経験が、後に紹介するようなさまざまな電話のコミュニケーションの可能性に連続していることが大いに考えられるのである。

(2) 伝言ダイヤル・パーティーライン・テレフォンクラブ

伝言ダイヤルは1986年NTTによってサービスが開始され、90年以降利用数は全国で一日50万件以上を越えている。本来は電話で利用する伝言板として、知りあい同志が連絡をとりあうための手段としての利用を見込まれていた。しかし、開始後3年も経たないうちに、伝言ダイヤルは、「匿名」の人々によってコミュニケーションを行なうための手段として、特にティーンエイジャーを中心とする世代に利用することが流行になり(櫻村, 1989) 現在ではダイヤルQ2などと組合わせた形で民間のサービスとしても行なわれるなど、日常的なコミュニケーション手段として一般化している。これに対し、パーティーラインも伝言ダイヤルと同様にNTTによってサービスが開始され、これもやはり知りあい同志が複数で同時に会話ができるものとしての利用が見込まれていたが、これもティーンエイジャーを中心とする世代によって「匿名」の者どうしでコミュニケーションを行なう手段として利用されるようになった。

テレフォンクラブは1985年に民間から発生したもので、現在では一般の雑誌メディアを通じても頻りに紹介されるなど、隆盛期にあると言われている。これは、ほとんどの場合異性間であることを前提としているが、「匿名」の個人同志のコミュニケーションのために

電話回線を個室の部屋とともに一定時間貸出すシステムである。当初はダイヤルQ 2のサービス（ツーショットダイヤル）によって、電話回線だけを提供するのが主流であったが、過剰な利用によって莫大な料金が請求されるようになったり、それをきっかけとして知りあった相手に対し犯罪が行なわれるなど、大きな社会問題となったために1991年の6月にNTTがサービスを中止したため、現在一対一で会話ができるのはテレホンクラブだけになっている（複数どうしの会話はパーティーラインで可能）。

以上のメディアによるコミュニケーションの内容は、多くの点で共通しており、特定のサブカルチャーとして行なわれている部分が多いことを前提とする必要がある。それは、これらのコミュニケーションのほとんどが性的なコミュニケーション、いわゆる「ナンパ」と呼ばれるものとして行なわれているものであるからだ。これらのコミュニケーションの展開については、特に若年層における性的な関心の増加と規範の弱化といった、性への意識や性に関する情報・メディアの変化からその背景を探る必要がある（例えば宮台，1993など）が、ここでは、あくまで「匿名」のコミュニケーションとしての特徴に関するものに限定して、それぞれのメディア利用について見る。

伝言ダイヤルでは、「ナンパ」を含むすべての「匿名」者どうしのコミュニケーションは、「オープンダイヤル」という、伝言を聞くための暗証番号をアクセスしやすいように規則的なものにした形（例えば1234など）で行なわれる（表4-2）。そのため、コミュニケーションの相手を特定するためには、オープンチャンネルに自分に特定した暗証番号をメッセージとして入れたり、電話番号を入れたりするなど、段階的な手続きを踏む必要がある。利用者にとっては、こうした手続きは一見煩雑であるが、実際は候補者を複数化することによって、相手の選択性の余地を高めるというメリットをもっている。メッセージ内容としては、他のメディアと同様、相手との直接の接触を目的としている場合が多いため、そこで何かがやりとりされるというよりは、簡単なプロフィールの紹介に終始することが多い。つまりこれらは、メディア上で完結するやりとりではなく、あくまでその後に行なわれる対面のコミュニケーションを前提として進行するコミュニケーションの中の一段階として行なわれていると考えられる。そのため、自己呈示に関しては、確かに表現上では「～てなわけですね」というつながりの決まり文句など、演技的な要素は多いものの、自己の生活誌を積極的に呈示する機会は少なく、偽装などによって回線上で完結した独自の自己イメージを演出するまでには至らないと考えられる。呈示される側にしても、相手を選択する上で特に基準というものは存在せず、特定のメッセージ内容が問題になるわけではない。いわば、これらのことは、対面状況で見られるコミュニケーションの開始の手続きにあたるもので、特に儀礼上の意味以外は少ないと考えられる。

表4-2 オープンダイヤルにおけるメッセージの例（1990年当時）

.....
「ハイども。こんばんは。えー大阪に住んでいる、えーシンというんですけど、えー今日結構ヒマにしていますので、よければ楽しい話とかいっぱいしたいと思いますので、

本稿は所収論文の元となったもので、内容が異なります。参照される場合はご注意ください。

えーよければ電話ください。え電話番号06、6××、××××です。えー女の子からの電話、待ってますんで。それじゃバイバイ。」(男)

「あ、こんばんは。あの、二十歳のヤスミです。んとー今日ずっとヒマな人は、お電話ください。4902のトリプルです。よければ、直電もお願いします。じゃさよなら。」(女)
.....

(岡田, 1993より転載)

対面状況においては、コミュニケーションは突然に始まるのではなく、特定の相手に対しコミュニケーションを行なう資格を成立させることによってようやくと開始される。コミュニケーションに対するこのような資格をゴッフマンは参与的地位 (participation status) と呼んでいる。参与的地位の獲得には、さまざまな方法があるが、例えば対面では、相手に対して体を向け、やりとりを行なう空間を確保することによって、その参与的地位が明示される。したがって、その空間に参与資格を示さないものがみだりに侵入したり、資格のあるもののコミュニケーションを妨げることは通常忌避される。

伝言ダイヤルで見られた、コミュニケーションの場所の段階的な設定は、この参与的地位を成立させるための手続きの一つであると考えられる。オープンダイヤルという形式は、不特定多数の人によるアクセスを可能にしているが、だからといって、段階的な手続きを踏まないですぐにその場でお互いの生活誌を詳細に公開するようなコミュニケーションが行なわれるわけではない。このような手続きは、相手に対する「回避」とのバランスをとった形で周到に進められる、接近を可能にするための一つの戦略であると考えられる。先に示した選択性の高さは、こうした戦略上のメリットとしても有効である。

テレフォンクラブ(以下テレクラ、二者間によるパーティーラインを含む)についても同様に、対面のコミュニケーションを補完する意味合いが強い。自己呈示は偽装することなく率直に行なわれることが多く、すぐに直接会うための交渉を切り出すなど、みだりに「接近」を行なうことは不適切であるとされる。しかしながら、そういった内容以上に、こうしたコミュニケーションの形式は、一つのものとして完結した会話のそれではなく、会話の断片としての性格を強くしている。

例えば、次のような会話は、テレクラで行なわれているものの典型であるという(宝島編集部編, 1994, p.74)。

男:「もしもし...キミいくつ?」

女:「23歳よ」

男:「今どこにいるの?」

女:「家なんだけど...」

男:(電話を切る)

一般に「ガチャ切り」と呼ばれるように、このような会話は、会話がいつでも任意のと

本稿は所収論文の元となったもので、内容が異なります。参照される場合はご注意ください。

ころ終了するという特徴をもっている。対面状況や、通常の電話においては、会話はすぐに終了するのではなく、必ず終了の前置きとなる段階 (pre-closing) を経て、お互いによって終了へ持って行くという手続きが取られる (Schegloff & Sacks, 1972)。しかし、ここでのコミュニケーションにおいては、そのような手続きなしに突然に電話を切ったり、切られたりすることが多いと言われている。また、会話の開始においても、電話では、実際の会話に入る前に相手の確認と自分の名乗りを行なうという手続きが通常行なわれている (Schegloff, 1977) が、ここでのコミュニケーションでは、特にそういった手続きなしに会話が先に展開し、途中で名前などが特定されるといったケースが少なくない。

こういった会話の断片化が行なわれる一つの理由は、やはり伝言ダイヤルと同様に、高い選択性の保持にあると考えられる。こうしたコミュニケーションにおいて、特定の一人の相手と終始会話を行なうということはほとんどなく、一定時間内にできるだけ多くの相手と話すということが、一種の規範となっており、実際に会うことを決める場合でも、複数の者と同じ場所で待ち合わせ、その場で相手を選択するといったことさえも行なわれている。この選択性を高くするためには、なるべく開始・終了といった手続きを省略する必要があり、その結果会話が断片化すると考えられる。

さらにこれらの断片化が可能であるのは、こうしたコミュニケーションがあくまで、その後の対面コミュニケーションの前置きであるという前提が多くの場合共有されていることによる。その前提の下では、こうした形での電話でのコミュニケーションそれ自体は、一つの儀礼的な過程に過ぎず、一つの会話として完結させる必要はない。単なるおしゃべりを目的として、電話だけでの会話に終始するというケースもあるが、その場合は開始・終了の手続きは履行される。

以上のような「ナンパ」のコミュニケーションにおける電話利用については、そこでのコミュニケーションが完結しているのではなく、あくまで対面のコミュニケーションを手続き的に補完するものであるという、半ば自明のことが確認されたに過ぎないが、こうした点があらためて強調されるのは、まず、この「ナンパ」というコミュニケーション自体が、これらのメディアを利用して行なわれるものの中で、ほとんどを占めていることにある。つまり、確かに次に示すような、あくまで回線上で完結したコミュニケーションが展開する場合があるものの、それは非常に限定的な性格をもっており、しばしば強調されるような、メディア独自のリアリティをもった関係という側面は必ずしも大きくはないと考えられる。同時に、対面のコミュニケーションがこのように周到な形でメディアにより相互的に補完されているという関係が、人々の基本的な認識としてあることが、再確認される。幾多のメディア論では、メディアは対面コミュニケーションと対立・分断された形でとらえられることが多かったが、実際の行動としては、まず両者は対立的な関係にあるのではなく、それぞれのコミュニケーションにおける経験を、それぞれに対して相互的に反映させていることが、むしろ基本的であると考えられるのである。

これに対して、同じ伝言ダイヤルを利用したものでも、「伝言サークル」とよばれる、特定の仲間集団が同じ暗証番号のスペースを使って行なうコミュニケーションは、少し性格が異なるものとされている。岡田は、ここで交わされるメッセージの特徴を、時刻と名乗り、挨拶の明示、身体的なメタファーと空間的なメタファーの多用、「伝言口調」と言われる独自の発話スタイルという、四点にまとめている(岡田,1993、表4-3参照)。これらについて簡単に述べると、伝言サークルの伝言では、メッセージの冒頭で必ず、伝言を入れた時刻と、伝言ダイヤル上での通り名(ハンドルネーム)が明らかにされており() そのように伝言を入れることを「部屋にあがる」といったり、伝言スペースを「1階」「2階」といった階数で呼んでおり() さらにメッセージ中に「ということで」「てわけで」といった間接話法が多用されているのである() これについて吉見らは、伝言に参加する者が、これらの特徴によって回線上に完結した自己の世界を成立させており、人工的に設定された状況のもとで、本名とは違う名前を名乗り、自らの身体を動員して仮想的な空間を動き回りながら、「通りすがり」の人とコミュニケーションをすることで、対面コミュニケーションと異なった独自のリアリティを経験していると見ている(吉見ほか,1992,pp.170,174)。同時に吉見らは一般のオープンダイヤルにしても、回線の自己と対面状況での自己のギャップが生じるのを避けるために、伝言ダイヤルでいくら親しくなったとしても、直接に会うことを避ける傾向があるとし、「回線内部の出会いの方に実際に会うこと以上のリアリティを感じてしまう通話者」の存在を指摘している(吉見ほか,1992,p.169)。

表4-3 伝言サークルにおけるメッセージの例(1990年当時)

.....

「Aです。今の時間は9時20分です。えーっと今ね家の方に着きました。えーっともう今日は最低、もうしんどかったよーってことで。患者さんの顔が鬼に見えたよって感じなんですけどもね。ほんと次から次と来る来るって感じで。結局ね終わったのがね、えー8時45分ぐらいかな。一応ね7時までなんですようちは。本当にもう最低ってことで。今からチェックしてきまーすということで。」(女、10歳代後半)

「えっとBです。ただいま9時と34分てなところですね。えーAちゃんもお帰りなさいということでね、お疲れさまでしたというところをお伝えしといてですね、えー私たちにゃね歯医者の方の先生の方が鬼にみえますよということをお伝えしときますよ。ほんとにねあんな痛いもん平気でギーギーギー、キーってやるわけでしょ。ウンあれは痛いわいうことでね。えーそれからねOさんももうすぐうーあと30分くらいで、自宅に着くんでしょいうかね。ご苦労さまということで。Eさんもオープントップご苦労さまということでね、ウン今日なんかアンラッキーな日みたいでね。ウンそのうちいいこともあ...」(男、20歳代後半)

「ハイ9時と54分Cだよー。最寄駅へね、帰ってきちゃったんですよ。会社にいませんよというわけでね。E君にAちゃんにOに、えーB、うーDちゃんにF君、皆さん皆

本稿は所収論文の元となったもので、内容が異なります。参照される場合はご注意下さい。

さんご苦労さまーというわけだね。えー何だわ、ウン雨がね、しょぼしょぼと降ってたんでね、結構ね、ウンあの一あれよ、傘があって助かったというわけで。何をブツクサいうてるんかわからんけどね。皆さん皆さんお疲れさまーというて突然でございますが、ファイナルよ。Cでした。皆さんおやすみなさいませ。」(男、50歳代前半)

.....

(岡田, 1993より転載)

このような「サークル」のコミュニケーションが、必ずしも対面のコミュニケーションを前提としていないのは事実であろう。地理的・社会的な距離を越えて、多様な人々とのコミュニケーションを経験できるのが、こうした「サークル」の利点であると述べる利用者も多く、福岡のものが大阪のパーティーラインに参加したりする例も珍しくはないのである(櫻村, 1989; 加藤, 1991など)。逆にテレクラにおいては、単におしゃべりに終始する場合であっても、やはり中野には中野近辺の在住者がかけてくる場合が多いと言われている。

「サークル」で行なわれているこれらコミュニケーションは、会うことを回避するという形で、回線において完結した一種の自己のリアリティを成立させていることは事実であるが、しかし、その場合でも、回線上の誰に対しても等しい単一の自己像を呈示するのではなく、あくまで相手との距離を想定した上でコミュニケーションの形態を使い分けているのである。例えば、同じ電話でも直接に1対1でやりとりする(「直電する」)場合と、あくまで「サークル」の場だけでやりとりするのでは、前者の方がより多くの内容の生活誌を公開するという意味で、「匿名でない」、つまりより「親しい」相手であるという意味の違いが存在していると考えられる。これは単に、複数の相手の要求に対して異なった自己像を使い分けるといったものにとどまるのではなく、むしろ、同じ相手であっても、コミュニケーションの場(「サークル」と「直電」)によって相手との距離をさまざまに変化させながら、異なったりアリティを呈示していると考えられる。例えば、ある女性ルポライターは、パーティーラインで知りあった「引っ越し」という名前の男性が、他にメンバーがいない「ツーショット」の状況で次のように態度を変容させる過程を描いている。

ほらおまえツーショットやぞ、電話番号教える、早よ今のうちに教える。

いつもは商社マンできどっている「引っ越し」の息づかいが荒くなる。

「や、どうしょ。あたし。どうしょ。」

いい年をして私は胸がドキドキしてきた。いつもの仲間たちと一緒にわいわいとりのめないやりとりをしていた「引っ越し」の男の部分初めて強く感じてしまう。(加藤, 1991, p.228)

ここから、同じ相手でも「ツーショット」になることで、そこに一種の「リアリティ」

の変化が生じていることがうかがえる。この「引っ越し」の態度は、この直後に他のメンバーが入り込むことによって「先程の取り乱した口調とはうってかわってひどく落ち着いたものいい」になったという。このように、「直電」をするということは、回線で行なわれている他のコミュニケーションと、単に回線上にあるというだけで同質なものではなく、相手との社会的距離において異なったコミュニケーションとして経験されていることになる。この場合の女性の動揺は、今まで「サークル」という形で距離を保たれてきた社会的なアイデンティティが、急に「男女関係」という個人的なアイデンティティに関わるものに変容させられてしまったことによると考えられる。その意味では、「サークル」で行なわれているコミュニケーションもまた、完結した一つのコミュニケーションというよりも、相手との一種の「接近」の手続きとして利用されているとも言える。実際にこの女性と「引っ越し」は、直接に電話をやりとりする前に、パーティーラインで一通りに話をするので、「サークル」でのやりとりを儀式化すると同時に、二つのやりとりのギャップを楽しんでいるという。これはいきなり相手に個人的に接近するのではなく、まず公共の場所で接触の場所を共有してから、あらためて個人的なやりとりの場所をもつという、対面状況でのコミュニケーション儀礼と非常によく似ている。したがって、ここでも、電話と対面状況の関係は、会うことの回避といった形で完全に断絶しているのではなく、むしろ、対面状況における経験が反映していることがうかがえる。

さらに、先に見られたような伝言ダイヤルの特徴にしても、多くの対面状況の経験が反映されていると見ることができる。例えば、時刻の明示が発言の冒頭にあることが指摘されたが、伝言上では、発言の間隔が任意に異なるため、発言者の交替は通常、話者が変わると同時に、違う話題の展開を意味することにもなる。そのため、発言者は前の発言との関連を意味付けるための目印 (marker) を置く必要がある。その目印の一つとして、時刻が利用されていると考えられる。通常の会話でも、会話の話題は、任意に転換するのではなく、前の発言の言葉を取り入れることなどによって、前の発言の基盤 (フロアー) に立ちながら、自分の新しい発言の基盤を作るといった形で、流れを調整しながら行なわれている (Hopper, 1992)。

例えば、この「サークル」の一つである「ケンカダイヤル」では、次のようなやりとりが行なわれていたという。

「1時と34分のヨー、ラリルレリックのイトーちゃんだ。このヤロー、まだいるんだよナァ、このションベン小僧が。いま十七階だよ。十七皆殺しのシャープ、早死にシャープ。訳分かんネーことやってんじゃネーヨ、バカが」

「15時43分はヨー、コージさんだよ。オー、いまケンカは二十階だよ、二十階皆殺しだよ。ケンカのホンチャンやっているからヨー、元気があったら、二十階まであがって来いよ、このヤロー...、以上」(『サンデー毎日』, 1989年8月13日)

本稿は所収論文の元となったもので、内容が異なります。参照される場合はご注意ください。

これらのやりとり自体、時刻と名前を言ってすぐに相手を罵倒するという、かなり異質な「リアリティ」を呈しているが、この時刻によって、前の発言と同じ基盤を維持しながら、やや突飛に見える話題への移行を可能にしていると見ることができる。そして、次からのやりとりの基盤を確保するために、さらに特定の階と暗証番号(皆殺し=37564)を指定することで、公共的なスペースから個人的なスペースへの移動を行なっている。もしこれが、日常とは完全に異なった「リアリティ」をもった攻撃的な行動なのであれば、暴力的で無秩序なやりとりが展開するはずであるが、実際はこのような儀礼をかたくなに守りながら、コミュニケーションが進行しているのである。

以上に見てきたことは、実際電話のコミュニケーションとして、普通に見られていることでもある。しかしそれは、電話のコミュニケーションの「リアリティ」を電子空間の中での確固とした領域として成立させるためというよりは、むしろ、電話の中でコミュニケーションを相互的に組織化していくという志向のもとになされていると考えられる。例えば、シェグロフは電話での会話の開始について、かけ手と受け手の確認が行なわれるとき、次のように、かけ手がはっきり名前を名乗らず、受け手に対しても断定的な口調が避けられ、疑問形が多用されることを示している。

- 1 ローラ(受け手): もしもし。
- 2 アーリン(かけ手): ローラ?
- 3 (0.5秒の沈黙)
- 4 ローラ: はい?
- 5 アーリン: ハイ!
- 6 (0.5秒の沈黙)
- 7 ローラ: ハイ。アーリン?
- 8 アーリン: あなた = はい。

上の例の2行目で、すぐにアーリンが「アーリンです」という名乗りをしないように、かけ手が最初のターン(話す順番)ですぐに名乗らず、またさらに次のかけ手のターン(この場合5行目)でも名乗らないという例は、電話の開始で多く見られることであるという。このような開始がとられる理由には二つあり、一つは、もしかけ手が「アーリンです」のように断定を行ない、受け手がかけ手の話すべき相手でなかったり、話すべき相手でもかけ手を確認できなかった場合、受け手にとっては、「失礼ですが、どなたですか?」といった、かけ手にとって好ましくない応答を行なわなければならない。そうした場合、いわば、受け手はかけ手のフェイスをつぶすことになる。

これに対し、「ローラ?」という疑問で話しかけた場合、まず、その呼びかけの声自体が受け手がかけ手を確認する機会の提供になる。もし相手が違えば受け手はそれを否定するだけ済むし、このローラのように、すぐに思いだせなかったとしても、かけ手はいさつ

本稿は所収論文の元となったもので、内容が異なります。参照される場合はご注意ください。

などの他の手段によって確認のための声を提供し続けることができるのである。少なくとも、このようにアーリンの名乗りが、呼びかけという形でローラに対し開かれている限りは、ローラはこうした確認の過程に対して協同的に参与することができるのである。基本的には、かけ手が受け手の最初のターン（「もしもし」）で受け手を確認すれば、そのままかけ手が受け手に対し話をする権利をある程度確信できるはずであるが、その確信の強弱にかかわらず、かけ手は相手の確認をあくまで疑問として呈示することで、受け手の側での確認と、その後の会話の処理が双方にとって（フェイスを守るといった形で）有利になるように展開するのである。

このようなことが行なわれるのは、電話でのコミュニケーションの相互性が、ノンバーバルキューの不在によって困難にされているためと考えられる。普通の対面状況であれば、視覚的な手がかりさえあれば、相手の確認と同定にこれだけの手続きを行なう必要がない。しかし、電話においてはこれらの手続きの省略は、一方で相手を仮定しながらコミュニケーションを行なうことを意味する。先の例の4行目で、ローラが「はい？」というような曖昧な返事をすることで、表面上は明らかな齟齬が見られないものの、双方による相手の想定がずれたままコミュニケーションが進行することになる。そのため、あらためてローラは7行目で相手の確認をやはり疑問の形で行なっているのである。むしろ齟齬が表面化せずに、こうしたコミュニケーションの流れのなかで相互的に確認が達成されるのは、ひとえにアイリーンが自分で名乗らずにローラによる示唆という形で相互性を保っているためである。このように電話では、対面状況ではさまざまな非言語的手がかりを用いて行なわれている相互性の確保が、あくまで言語的な手続きの中で行なわれるという一つの特徴がある。

以上から考えれば、伝言ダイヤルを通じて行なわれている「匿名」のコミュニケーションの特徴も、対面状況のような相互性の確保をメッセージの中での手続きとして行なっていると考えることができる。すでに示したように、空間的なメタファーはその相互的なコミュニケーションの基盤の確保であったし、頻出する間接的な話法も、電話の開始に見られたような、常に相手との相互性を確保するために断定を避けるという一つの方法としてみることができる。したがって、これらの特徴は、それ自体が独自のリアリティを作りだしているというよりは、あくまでコミュニケーションの中での相互性を確保するために行なわれているものであり、対面状況と全く異質なものとして存在するのではなく、むしろ相互性を志向している意味では同じものであると考えられる。

3.2. パソコン通信における匿名のコミュニケーション

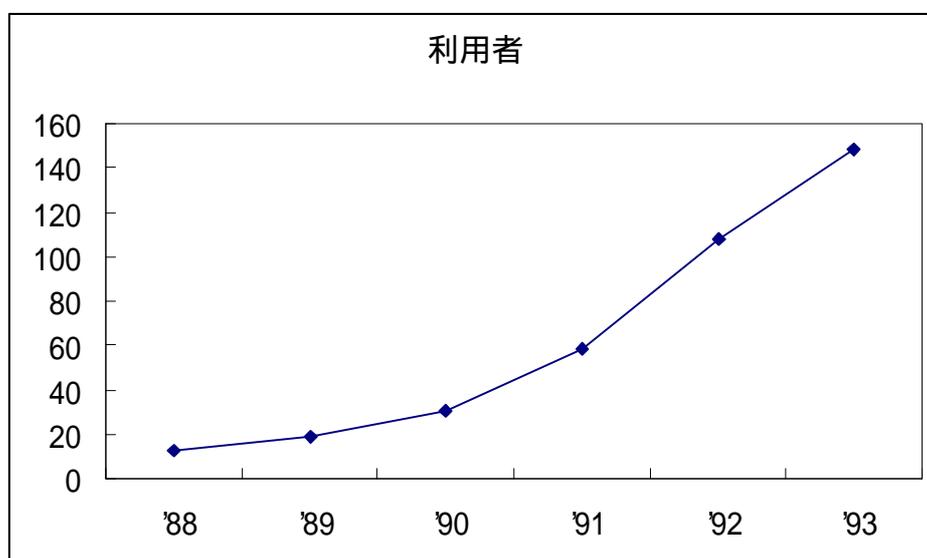
一般にパソコン通信システムといっても、ごく限られた人々のために手弁当で運営される「ローカルBBS」といったものから、企業によって大々的に運営される「商用ネット」と呼ばれるものまで、さまざまな規模のものがある。さらには、特定の組織や職種の人のために運営される、企業内部のシステムや研究者用のシステムなど、種類も多様である。

本稿は所収論文の元となったもので、内容が異なります。参照される場合はご注意ください。

しかしながら、ここでは、利用者の一般性が高く、また情報内容の公開が比較的容易であるという理由から、商用ネットのフォーラムと呼ばれるパソコン通信システムに限定して話を進める。

パソコン通信の利用者については、図4-2に示すようにここ数年で増加の傾向を見せており、また、そこでの「匿名」のコミュニケーションについても、通信の利用動機として「見知らぬ人とコミュニケーションができる」という点を挙げる人が、商用ネット利用者では28%、企業の通信システム利用者でも30%と、インセンティブとしてかなりの意味を持っていると考えられる（川上ほか，1993；橋本ほか，1993）。

図4-2 パソコン通信の利用者（単位：万人）



パソコン通信による「匿名」のコミュニケーションについては、代表的なものとして電子掲示板とフォーラムとチャットという二つの種類が挙げられる。それぞれを伝言ダイヤルで例えると、オープンダイヤル、伝言サークル、パーティーライン相当すると考えられる。このうち、前者の掲示板に関しては、公開されている限りでは利用形態が伝言ダイヤルと酷似しており、また、パソコン通信の特性としてもフォーラムと重なる部分大きい。また、企業の通信システムなどではフォーラムが存在しないかわりに、電子掲示板がフォーラム的な利用をされるなど、両者の質的な境界は曖昧である。また、この他にもチャットとあって、以上のことから、紙幅の関係もあり、ここでは特にフォーラムを中心に考察を行なう。

まず、パソコン通信全般に関わることでもあるが、フォーラムにおける「匿名」のコミュニケーションをみた場合、最も特徴的であると考えられるのが、音声という手がかりの不在である。伝言ダイヤルでは声によって少なくとも男性と女性の区別は行なわれ、それを前提としてコミュニケーションが行なわれていたが、パソコン通信ではそのような最低限の手がかりも失われている。これについては、アメリカのカーネギーメロン大学を中心

本稿は所収論文の元となったもので、内容が異なります。参照される場合はご注意ください。

とした一派が「社会的手がかりの減少」(reduced social cues)として定義し、キースラー、スプロール、シージェルなどによってその影響に関する一連の研究が行なわれている。(Siegel et al.,1986;Sroull & Kiesler,1986;Sroull & Kiesler,1991;McGuire et al.,1987)が行なわれている。それらの研究によると、社会的手がかりの減少は、次のような効果をもたらすことが言われている。

コミュニケーションの効率の向上；これはパソコン通信の基本的な性能としての、伝達の速さや情報の公平な分配といったものによる。従来の組織コミュニケーションに見られたような、地位が上のものほど、より多くの情報を早く得ることができるといった、情報の獲得における社会的な影響が減少する。また、不特定の相手に情報が流される場合が多いので、相手の地位などに応じた発言(挨拶など)を考慮する必要がなく、常に必要な情報だけがやりとりされることになる。しかしながら、このことは、同時に発言の脱人格化(depersionalization)と言われる、いわば無味乾燥で、私的な配慮を欠いた特性として、ネガティブな意味をもって受けとられることも多い。

コミュニケーションへの平等な参加；パソコン通信では、発言の平等性を表わす指標が、対面の場合に対して最大二倍になることが確かめられている(Siegel et al.,1986)。対面の会議では、参加者の発言する機会は、地位や年齢、性別といったものに影響されるのに対し、通信上ではこれらの社会的な手がかりが失われるためであると考えられる。

社会的規範の減少；パソコン通信では、一般の対面状況では行なわれにくいような相手に対する(ネガティブな)感情的・攻撃的な発言が多いと言われている。これは一般にフレイミング(flamming)と呼ばれており、対面状況に対して、パソコン通信上の特に「匿名」の状況で、このフレイミングが多く見られることが、実験状況や実際の利用者の報告によって確かめられている。(Sroull & Kiesler,1986;Siegel et al.,1986;)このフレイミングに関しては、後に詳しく検討するが、社会的な手がかりの減少が主な原因として考えられている。それに加えて、先の脱人格化に見られたような、对人的配慮を欠いた「冷たい」発言が攻撃的な印象を与え、それがフレイミングを引き起こす、とする見方もある。

集団意志決定への影響；社会心理学では、人間関係の調整や、個人への配慮に関する情報が少なく、単に純粋に実務上の情報交換だけが行なわれる集団では、情報の説得性が高まり、より極端な、リスクの大きい(risky)方向へ意志決定がなされる、という傾向(リスク・シフト)が指摘されている(Kogan & Wallach,1967 など)。これに従えば、パソコン通信のコミュニケーションでも、先のような社会的手がかりのない脱人格化された情報がやりとりされることで、個人の態度変容の大きさが拡大するという効果が期待される。これについてもシージェルらによって、議論の結果による意見の変更の大きさは、パソコン通信が対面の二倍近くになっていることが指摘されている。(Siegel et al.,1986)

以上のような効果が、特に「匿名」のコミュニケーションにおいてどのように現れるかについて、研究者により議論されているのが、先に示した「没個人化」という問題である。

その中でも特に「フレイミング」という現象は、パソコン通信によってもたらされた没

個人化の典型として多くの研究者により位置付けられている。すなわち、人々は、通信の回線上で自分のアイデンティティを表わすものを全く失い、原子化された個人として、それぞれに表面的で無味乾燥な情報を交換するにすぎない。そして、そのような統制のない行動は、ちょうど目隠しをされて道路を走る車のように、さまざまな衝突の危険をはらんでいる、とするものである。さらに、フォーラムのようなコミュニケーションは、先に見た特性から見ると、存在感が低く、コミュニケーションの進行におけるキューレスネスが高く、そして元来相手に関する社会的手がかりが非常に少ないものとして位置付けられるので、フレミングがもっとも起こりやすいものとして考えられる。

しかし、このフレミングという現象には、多くの疑問が呈されている(Lea et al., 1992)。第一に、フレミングという言葉の曖昧さがある。単に相手に対する攻撃的な発言だけでなく、あらゆる感情的な表現がフレミングとして判断されることがあり、また、その判断基準自体が明確でない。パソコン通信では、明記している以外に相手の特定が困難であり、また、それがどれだけネガティブな意味を持つかについては、受け取る人によって多様である。第二に、実証例としても、フレミングとされる現象の存在は多くない。実験においても、対面状況とパソコン通信上で有意差がないとするものも多い(Rice, 1990 など)。その原因ともなるが、第三に、フレミングを過大に認知する機制的存在がある。電子会議のような形式のコミュニケーションは、常に多くのオーディエンスを背景に行なわれているので、そこで攻撃的なコミュニケーションが行なわれると、それだけ多くの人に目撃されることになる。また通常このような感情の表出は対面状況では人の目を避けて行なわれるので、結果として電子会議で攻撃的な行動が行なわれやすいという印象を与える。また、別の研究では、不特定多数に宛てられたメッセージよりも、自分だけに特定されたメッセージの数を多く見積もるといふ認知的なバイアスがあることが指摘されている(Sproull & Kiesler, 1986)が、それに従えば、特に否定的な意味の強いフレミングは、自分に特定された経験として記憶されやすいと考えられる。

これに対し、スピーアーズらは、この「没個人化」を焦点としたパソコン通信の実験において、「社会的アイデンティティ」と「個人的アイデンティティ」の問題を取り上げている(Spears et al., 1990; Spears & Lea, 1992;)

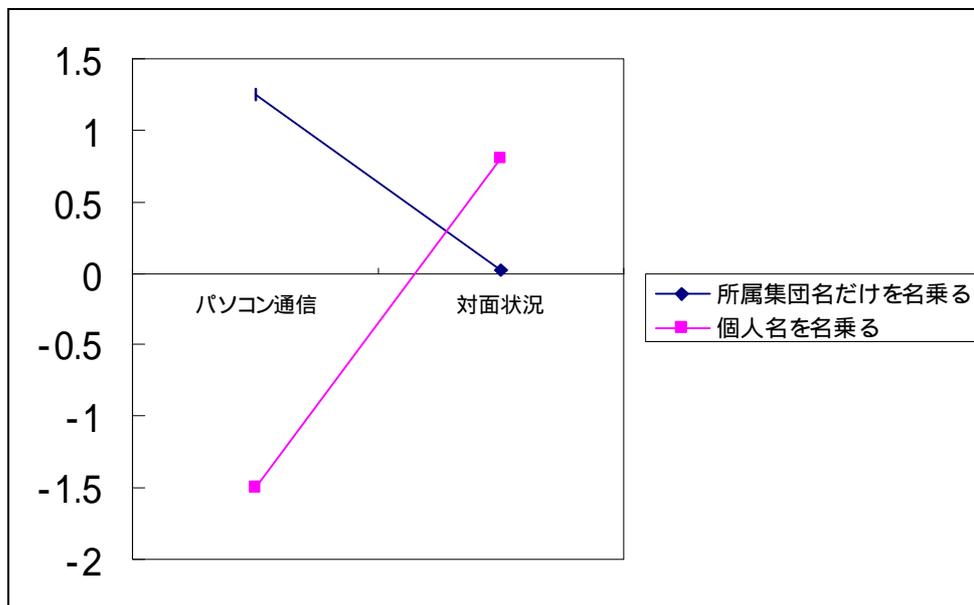
先に「没個人化」については、単なる個人的アイデンティティの喪失だけを問題にした概念として取り上げたが、実はこの「没個人化」という概念もまた、別の側面があることが指摘されていた。それは、意識上での他者との相違の喪失による、他者への同調傾向の増加、すなわち社会的カテゴリーとしての自己意識の顕在化・社会的アイデンティティの上昇という面である(Diener, 1979; Lindskold & Prost, 1981)。これに従えば、「没個人化」としての「匿名」状況は、必ずしも統制の取れない敵対的な行動をとるのではなく、むしろ過剰とも言える他者への同調傾向をもたらすことになり、実際に集団意識の高いものでは、没個人化状況において、この傾向が高まる部分が部分的に確かめられた(Reicher, 1984)。

スピーアーズらは、この傾向がパソコン通信状況において、より正確に表れるのではない

本稿は所収論文の元となったもので、内容が異なります。参照される場合はご注意ください。

か、という仮説のもとに、所属集団名か個人名のうち、発言の際にどちらを名乗るかによって、所属集団に関するアイデンティティの顕在性を操作した群に分けて、両者について、対面での会議と電子会議を行なわせた結果の意見変容や、発言内容を比較した。それによると、自分の所属集団だけを名乗る、社会的アイデンティティの高い群では、対面での会議に比べ、電子会議の方が、集団の決定方向に対する態度変容が大きく（集団規範への同調傾向が高く）課題志向の発言が少なく、人間関係志向の発言が多い、という傾向が見られた。これに対し、個人名だけを名乗る社会的アイデンティティの低い群では、ほぼ反対の傾向が見られた（図4 - 3）。

図4 - 3 集団規範への同調傾向



このことから、個人名を名乗らず、所属集団名だけを名乗るような「匿名」の状況においては、パソコン通信は、集団についての社会的なアイデンティティに関する意識および発言を増加させるということが分かる。そこからリーらは、「没個人化」が、単なる「匿名」の状況を表わす概念から、そのまま攻撃的・反規範的な行動の原因となる概念へと混同されていることを指摘し、パソコン通信におけるフレイミングという現象に対しても疑問を示している（Lea et al., 1992）。

ここからさらに、パソコン通信における「匿名」のコミュニケーションでは、他人に対する「社会的なカテゴリー」に関する認知的側面が拡大し、個人的なアイデンティティとの乖離が進行するという可能性が示唆される。さらに、相手に対する「匿名性」を低減させる状況においても、いわばステレオタイプの認知がパソコン通信においては促進的に作用すると考えられる。既存の社会的アイデンティティだけでなく、さまざまな「カテゴリー」を表わす言葉を用いながら、それを一つの通信上でのアイデンティティとしていると考えられる。利用者がさまざまに用いているハンドルネームもまた、こうした通信上で

のアイデンティティを確認するための一つの手段なのであろう。

その意味では、アイデンティティの防衛のために、対立的なカテゴリーを攻撃するという形で、何らかの敵対的な発言も生じる可能性がある。さらに、こうした社会的アイデンティティの促進に対し、それに対するような形での反集団的な態度を促進する効果も認められることから、結果として人々の先有傾向としての違いを拡大することになり、両者の対立が、そのまま敵対的な発言として生じやすくなるかも知れない。しかし、それはあくまで集団間レベルの問題であって、個人レベルでの攻撃性の促進とは次元を異にする。

さらに、こうした社会的アイデンティティの促進に関して、通信の中に暗黙に存在するオーディエンスの存在が欠かせないものとして挙げられる。人々が通信上に投げかけているさまざまな「カテゴリー」としてのアイデンティティは、そのような「観衆」の前での「演技」として、表層的で断片的な自己呈示としての性格を強くしている。電子メディア上での自己呈示がもつ、自己充足的（コンサマトリー）な楽しみとしての側面は、すでに森岡が指摘している（森岡，1993）。例えば中年の男性が「セーラームーン」を名乗るなどの、「現実」の個人的なアイデンティティに対照した形で、「もうひとりの私」を演じることによって、不特定多数のオーディエンスのまなざしに支えられながら一つのパフォーマンスを成立させるという、オーディエンスとの共謀関係の中にある一つの「共同性」が、そこには見出せる。

パソコン通信で見られるこのような演技、あるいは「印象操作」としての行動は、フレーミングにも重要な意味をもつ。フェルソンは、通常、他人が見ている前では人は攻撃的な行動をとらないという通説に対して、男性服役者に対するインタビューや調査などで、喧嘩をしているときの観衆の存在が、彼にとっての「男らしさ」というアイデンティティを強化する印象操作の効果として、攻撃行動を促進することを明らかにしている（Felson, 1982）。これに従えば、パソコン通信におけるフレーミングは、通信上の自らのアイデンティティを強化するために、多くの観衆に訴えることによって得られる効果として、むしろ故意に電子会議という「舞台」を選んで行なわれているとも考えられる。これは先に示したアイデンティティの防衛とも関連している。物理的には、発言を電子メールで行なうことも可能であるし、実際に第三者の前で他人を攻撃することはたとえ通信上では「匿名」であるとしても、自らの印象も悪くするリスクも抱えている。にも関わらず、それが行なわれるのは、そうしたリスクよりも、人々の「共同性」に訴えることの利益が大きいためであろう。

実際、パソコン通信で展開しているコミュニケーションが、単なる無味乾燥な情報交換や、社会規範に反した刺激的な内容をもつものではないことは、多くの人が指摘することである。利用者の意識としても、新しい社会関係を作りだし、それを維持する、あるいは既存の対人関係を発展させるための利用というものは、一つの共通した次元として、すでに見出されているものである（池田，1990 など）。ライスらは、医者による電子会議に対するフィールドワーク的な研究で、参加者の間に、単なる実務に関する情報交換だけでな

本稿は所収論文の元となったもので、内容が異なります。参照される場合はご注意ください。

く、連体感・緊張緩和といった感情的な (socio-emotional) 内容が見られ、その比率は敵意といった否定的な内容よりもはるかに多かった (前者 28% に対し、後者 4%) ことを確かめている (Rice & Love, 1987)。このような関係の維持や発展のためのパソコン通信の利用は、パソコン通信のもつ、もう一つの側面として、研究対象としても注目されつつある (Walther, 1992; Walther & Burgoon, 1992 など)。

したがって、ここにおいても、パソコン通信のコミュニケーションと対面でのコミュニケーションのもつ相互的な関係が問題となってくる。ある組織の調査によれば、電子メールをやり取りする相手の 30% 以上が、100 ヤード以内の近接したところにおり (Walther, 1992) また、川上らの調査では、パソコン通信上で知りあった人と「会いたい」という意識をもつ人が 70% おり、実際に会っているという人が、「ときどき会っている」を含めると 40% 以上になっている (川上ほか, 1993)。これは、伝言ダイヤルでの発言が、単に回線上で完結したコミュニケーションに終わるのではなく、コミュニケーションの「手続き」としての側面が大きいということと共通していると考えられ、パソコン通信においても、メディアを越えた包括的な状況での、人間関係の維持・発展が行なわれていることを示している。

例えば、フォーラムでの電子会議においては、相手のフェイスを守るためのさまざまな方略がとられているが、特に興味深いのは、フェイスマークと呼ばれるものの存在である。これは、例えば「(^_^)」に「笑」という意味を持たせるなど、人の顔を模した記号によって、文章だけでは伝えられない感情を伝えるものであるが、それだけでなく、「でも A さんの意見はかなり僕と違うなあ (^_^)」というように、反論をすることによって相手のフェイスを壊しそうな場面を、フェイスマークで親近感を表わす事で、フェイスを保つ例などに多く見られている (高本, 1993)。

このようなフェイスの維持は、その場での一回限りのものとしてだけではなく、むしろコミュニケーションのやりとりの中で作られている場合も多い。例えば、何気なく書いた発言が、ある人のフェイスをつぶすような内容になってしまっている場合、つぶされたフェイスの持ち主は、元の発言者のフェイスを保ちながら、自分のフェイスの回復を行なおうとする。この場合、ある発言を、別の発言のコンテキストによって変化させる (「あの発言は、悪口に見えたでしょうが、実は冗談でした」的に) ためのやりとりが繰り返されることになる。

ここに、フォーラムにおける非同期性の影響がみられる。つまり、フォーラムにおける発言は、それぞれが出される時点では、一つの文脈として完結していなければならない。しかもそれぞれは、不特定の人によって、別の文脈として変化させられる可能性を無限にもっている。そこで人々は、前の発言者のフェイスを保ちながら、同時に自分のフェイスもたてられるように、発言を構成している。ハイエムストラは、組織での電子メールコミュニケーションの発言において、相手のフェイスに脅威を与えるような発言があった場合に、どのような戦略がとられているかを実際に内容分析している。その予備調査の結果に

本稿は所収論文の元となったもので、内容が異なります。参照される場合はご注意ください。

よると、相手のフェイスを脅かしたままにしたケースが、21%であったのに対し、何らかのフェイスを守るための方略 (Politeness strategy) が 75%のケースで行なわれていたという (Hiemstra, 1982)。そのうち、消極的な方略が積極的な方略の二倍を占めており、通常電子メールでは相手のフェイスを無視した課題志向的な発言が多いと言われていたが (例えば Sproull & Kiesler, 1986 など) フェイスへの関与が欠落しているというよりも、むしろ敢えて消極的なフェイスを選択しているという可能性が示された。

以上をまとめると、パソコン通信フォーラムにおいて「匿名」であるという状況は、根本的に疎遠という意味を持つのも、親密という意味を持つのもなく、両者はあくまでコミュニケーションにおけるバランスとして問題になるに過ぎず、その均衡をいかに保つか、という技術上の問題には大きく作用するが、その均衡状態自体はメディアによっても、大きく変わることはない、ということである。フレミングのようなコミュニケーションは、そのバランスが崩れた一つの例であるとみることができるであろう。実際にパソコン通信でのコミュニケーションに関するユーザーの意識としても、「初期」会話としては、職業といった「社会的付属物」を取り払ったところで (純粋な意見や情報交換として) 会話が成立するが、「長い間付き合ってくる」と、「そういうものを抜きには話を進められなくなってきて、どうしても職業や経歴を明かさざるを得なくなってくる」。しかし、「その後でもう一度、今度は心まで裸になって」(付属物を取り払って) コミュニケーションをするという、回避と接近のバランスの問題が指摘されている (Lady & Stranger, 1993, pp. 77, 78)。従来の研究ではこの「初期会話」としての性格が強調され、それがパソコン通信一般の特性とみなされて来たが、そこからの接近に関する側面が、先に指摘したコミュニケーション維持の問題と合わせて、今後は強調されるべきであろう。

3.3. その他の電子メディアにおける匿名のコミュニケーション

以上に見てきた他に、現在の日本での普及はそれほど高くないものの、「匿名」のコミュニケーションのためにメディアの利用が行なわれている例がある。ここでは、それらが以上に見たメディアと同様の可能性を見せていることを確認するとともに、以上とは少し異なった視点でこれらの利用について考察したい。

(1) アマチュア無線、パーソナル無線

アマチュア無線は、アメリカではすでに 1910 年代に非常にポピュラーな存在になっており、アメリカ全土でラジオ・クラブが作られ、全国的なネットワークを形成していた。電話とは異なり、初期の無線は技術上受信先をコントロールできなかったため、はからずも不特定の人と交信する機会が多かったのであるが、逆にそれが魅力となって、若者たちの間に広がっていったという (吉見, 1993)。日本では 1927 年に初めて免許されたが、戦後に資格の改正・簡素化が行なわれてからようやくと普及しはじめ、無線局の数も 1965 年に

本稿は所収論文の元となったもので、内容が異なります。参照される場合はご注意ください。

は4万5千局だったのが、1970年代になって急速に増加し、1980年には48万5千局で、1992年現在では128万局にまで及んでいる。

アマチュア無線は比較的高度な知識と資格を必要とし、利用層も限定されるものであったが、これに対して、日常生活において電波を簡単に利用できるような制度も現れていった。そのさきがけとして、アメリカでは、1958年に個人用の周波数帯が設置されていたが、これは1970年代にC B無線（Citizen Band Radio）と呼ばれる簡易無線として、免許申請数だけでも480万人（1976年）という大ブームとなった。利用法としては、特に自動車に搭載して、凝ったハンドルネームを名乗り、通りすがりの人と道路情報や車の修理方法などの他、おしゃべりとして車についての議論や人生の話などをするといったものが多く、このような利用によって誰もが参加できる「匿名」のコミュニケーションの世界を広げていったという（Dannefer & Poushinsky, 1979）。日本でもアメリカのC B無線の例にならい、すでに1962年に市民ラジオという形で、一般市民向けの周波数帯が設置されていたが、混信が多いなどの問題が多かった。本格的な利用の拡大が生じたのは、1982年12月にパーソナル無線という、より手軽で混信の少ない簡易無線が導入されることによって、無線利用者が急速に増加し、局数としては1985年にはアマチュア無線70万局をはるかにしのぐ123万局が申請を受けており、それ以降は漸増傾向になったものの、1992年現在で160万局に及んでいる。日本におけるパーソナル無線の利用実態に関しては、知る限りにおいて調査などが行なわれている例は見られなかったが、普及の最盛期において発生した次のような事件は、日本でもアメリカと同様に、「匿名」のコミュニケーション道具として若者に利用されていたことをうかがわせる。

『北海道の女高生殺しは無線交信仲間で交際を断わられて凶行』

北海道千歳市美笛の雑木林で九日、十勝管内池田町の高校1年A子さん（15）が他殺死体で見つかった事件の道警捜査一課、千歳署捜査本部は十六日夜、無線交信仲間だった札幌市白石区のトラック運転手B（29）を殺人と死体遺棄の疑いで逮捕、Bは犯行を認めた。

Bはパーソナル無線の交信で知り合い交際していた百合子さんに、もう付き合わないといわれ、「カッとなって殺した」と供述している。

（中略）

Bは無線の交信で「ロマンス男」と名乗り、たびたび無線で女性に声をかけていた、という。

（1987.07.17 毎日新聞 東京本紙朝刊 6頁、一部省略）

ここでもやはり、通信メディアによる「ナンパ」の利用として、ハンドルネームを用いた「匿名」のコミュニケーションが行なわれており、時期的にも大都市地域で伝言ダイヤルが発生した時期とちょうど一致している。パーソナル無線もまた、当初はスキーやドラ

本稿は所収論文の元となったもので、内容が異なります。参照される場合はご注意ください。

イブ中の仲間うちでの交信といった、知りあいどうしのコミュニケーションを目的として作られていたのであるが、車と組み合わせることによって、より広範囲のネットワーク形成が可能になり、このような見知らぬ者どうしの出会いが生じた例は少なくないと思われる。

別の記事によれば先の高校生は自室に無線機をおいて、近くを通る車と交信していたそうであるが、アメリカでも車だけでなく、自宅に無線機をおいて1日数時間も交信を続けるユーザーも多く見られたという。ケルボらは、こうした無線愛好家83名に調査を行った結果、伝言ダイヤルやパソコン通信と同じような、無線上でのサークルの形成があり、そこでの独自のハンドルネームやジャーゴンが存在していることを指摘している。ケルボらはそれを性格づけるに当たって、村落共同体的な「コミュニティ」とはまた別の、社会学者のジンメルが提唱した「社交性」という概念を用いている。「社交性」とは、「その集まりの中で参加者が持っている客観的特性、つまり当の集まり以外に中心がある特性」を完全に排除した上で、表層的に「みんなが平等であり、一人一人が尊重されているかのように振る舞う」ゲームをさす。CB無線とは、都市化による人々の大衆化・原子化により、失われてしまったこうした共同の領域を取り戻そうとする一つの動きにほかならない、というのである(Kerbo et al., 1978)。しかし、ここで重要なのは、そうしたゲームによって成立する親密さそれ自体ではなく、それがあくまで相手との距離を保ち、回避をスムーズにするための、コミュニケーション方略に裏打ちされている4)、ということにある。ケルボらは同時に、CB無線では、あまりに深い感情的な言葉のやりとりは忌避されており、深入りしない関係として、回避のバランスをとりながら相手とのやりとりが行なわれていることを指摘しているが、その反面、無線で話した相手と対面で会うようにしていると答えるものが60%以上おり、こうした出会いが単に無線上で完結した、現実と隔絶した関係として経験されているわけではないことを示している。

以上から、CB無線が、伝言ダイヤルやフォーラムと同様な可能性をもっていたことが示され、同時に、そのような可能性が「社交性」という概念に集約されることが明らかになった。このようなネットワークには、誰もが、いつでもどこでも参加することが可能であり、また、そこでは「匿名性」が守られているため、社会的地位や属性にとらわれることなく、他人によって尊重される(フェイスをもった)自己像を演じることができるのである。

しかし、ここには、他のメディアにも波及し得る一つの問題がある。それは、一見既存の社会関係とは独立した、平等な関係が成立しているはずのこうした社会的な関係も、より広範な文化的な価値体系にとりこまれる可能性があるということである。

例えば、CB無線における「匿名」の男女の会話を分析したダネファーらは、男から女に向かってなされる会話が、多分に性的なコードに支配されていることを指摘している。具体的には、記録された会話の9割が男性からの会話であること、性的な含意のあるハンドルネームによって女性が呼ばれること、内容そのものが性的な交際を誘うものであること、などを挙げている(Dannefer & Kasen, 1981)。しかしながら、性的な含意をもつハン

本稿は所収論文の元となったもので、内容が異なります。参照される場合はご注意ください。

ドルネームに対する女性の対応としては、明らかにそれに反発するものは極めて少なく、事例の95%で、女性側がその呼称を暗黙に受け入れていることが明らかになっている。しかし、これはむしろ受け入れざるを得ないという方が正確である。まず、無線というメディアの性格上、自分に向けられている言葉に対しては、言語的な反応以外は表現を表わしにくい。そして、性的な呼称というものはあくまで、含意という形で表面には現れず、それに言及することは、言及した方で性的な含意を発していることを意味する。もし女性がこのような呼びかけに反発して、相手にやめるように言ったとしても、それに言及するのは女性の方であり、女性の方が性的な含意を発することになる。また、無線の場合、最初にコールサインを確認し、受信を承諾したあとで会話が始まるので、このような呼びかけに反発して交信への応答を止めてしまうと、それは会話の途中での突然の拒絶を意味することになり、相手のフェイスをつぶすことになる。

じつは、このような例は「匿名」の対面状況でも普通に見られていることでもある。しかも、それは決まって男性から女性だけになされるという非対称性をもっている。これは、「ストリート評言」と呼ばれており、酔っぱらいのおじさんが通りすがりの女性に「ヒューヒュー」といった形で声をかけるような例が典型である。しかし、このような形での接近は、「匿名」のコミュニケーションとしては明らかに相手の領域の侵犯となる。安川はこうしたストリート評言が「安全」に遂行される理由として、ストリート評言の「両義語句」性と、表面的には好意的評価であること、の二つを挙げている(安川, 1991)。とは、ストリート評言が明らかにターゲットである女性に向けられながら、仲間の男に話されるなどして、「そうはしていない」という外見を保たれながらなされている、ということである。これに女性がうっかり反応すると、女性の方から接近を開始したことになり、男の侵犯は正当化される。では、無視や反発は、かえって相手のフェイスをつぶすことになり、いずれにせよ、女性は男の仕掛けにはまってしまうのである。

実際、以上に見てきた「匿名」のコミュニケーションにおいても、本来は誰でも平等であるはずなのに、実際は男女の間で非対称の構造が見られている。第一に、それぞれに最も多く見られた「ナンパ」という形態が、(当人の意図は別にして)男性が女性を誘うという非対称性を暗黙の前提としていることが指摘される。

また、これらの男性中心的な傾向が見られる原因としてダネファーらは、C B無線という音声だけのコミュニケーションにおけるコミュニケーション・キューの少なさが、唯一の手がかりである声の性別への依存という形で、性的なステレオタイプを強調させると見ているが、このことは、3.2. で見たような、パソコン通信における「社会的カテゴリー」の促進という問題と直接に関わってくる。

しかし、それは単にC B無線やパソコン通信というメディアが相手への「カテゴリー」的認知を形成するのではなく、パソコン通信での実験において社会的アイデンティティが低い群では逆の結果が見られたように、あくまで、そのような社会的アイデンティティが前提として存在するところで促進的に働くという意味をもつのである。このような傾向が

本稿は所収論文の元となったもので、内容が異なります。参照される場合はご注意ください。

問題になるのは、そうした社会的カテゴリーの「ひとり歩き」が促進されるという意味だけではなく、先の男女差に見られたような、社会的カテゴリーの非対称的な適用が、「社交性」という、表面的に成員の平等が保証されている関係の中で隠蔽されてしまうという、その事実にある。確かに、「カテゴリー」の適用は、その「カテゴリー」自体が偽装されている可能性があるために、特に問題にはならない。女性のハンドルネームを語る男性が、「女性」的なアイデンティティを強めたところでさしたる問題はない。それが問題となるのは、その「カテゴリー」の背後に慣習として成立している「社会的に標準化された期待」を暗黙のうちに再生産してしまうことにある。男性が女性を装えること自体が、すでに何らかの女性に対するステレオタイプを背景としているはずであるが、そういった矛盾が「匿名」の関係で問われることはないのである。

(2) 電話盗聴

最後に、やや一般化しているとは言い難いものの、電話利用者全般に関わる問題として、近年の電話盗聴の問題は看過できないであろう。この傾向は特に電話機のコードレス化によって増加しており、また、盗聴器自体の入手が非常に容易であることが原因であると言われている。

このような形態は一見コミュニケーションと呼びにくいものであるが、他の「匿名」のコミュニケーションメディアの形態とある意味では共通している。それは、これらが、実際にメディアの上で個人的なやりとりを行なう(「役者」としての)ヨコのコミュニケーションとそれらに聴衆(観衆)として接触するタテのコミュニケーションという、二重のコミュニケーションが成立している点である。盗聴の場合は二つのコミュニケーションへの参加者が全く別れているが、他のメディアでは聴衆と「役者」の立場は交換可能である。

ゴッフマンはこのようなやりとりの外側にたった、観衆におけるコミュニケーションのあり方を「傍観者」あるいは「覗き」のコミュニケーションと呼んでおり、それは舞台(メディア)において行なわれているコミュニケーションとは異質のものであり、一つの事態が展開していても、それは、観衆の立場にいるものと、やりとりを行なう立場にいるものにとっては、全く異なった意味体系(フレーム)をもって経験されることになる(Goffman, 1974)。例えば、やりとりを行なっているものにとっては真剣な喧嘩であっても、それは観衆にとっては娯楽的な芝居に見えるといったことは日常でもよく経験されている。しかしながら、両者は全く隔絶されたものではなく、観衆が「役者」の立場に同化しようとしたり、あるいは「役者」が観衆の立場を考慮しながら目の前のやりとりを変化させるといったことはよく行なわれている。これは先にパソコン通信で見たようなオーディエンスを意識した中でのフレミングの促進といったものと関連づけて考えることができる。

盗聴における「楽しみ」があるとすれば、それは、このような異なったフレームの存在を前提とした、フレームの操作にあると考えられる。実際にこのような盗聴者としての体験者は、盗聴されている人々の立場を「想像する」ことに、盗聴の楽しみがある、と述べ

本稿は所収論文の元となったもので、内容が異なります。参照される場合はご注意ください。

ている（宝島編集部編，1994）が、これはつまり、盗聴する側のフレームを操作して盗聴される側のフレームに一致させるという、その過程としての楽しみを示しているものと考えられる。したがって、このような楽しみが成立するのは、盗聴される相手があくまで「匿名」であることによって、フレームの境界が保たれている場合であって、それが家族や友人のように、自分と同じ立場を共有しているものである場合は、「おもしろくない」のである。

しかしながら、盗聴というものは一方の立場だけでフレームの操作であって、それ自体のもつ意味は小さいものであるかもしれない。むしろ、盗聴というものはこのような、メディアによる聴衆によるフレームの操作が、アクセスの容易さによって、電話という日常的なやりとりの場にまで及んでいることを象徴的に示している。以上に見てきたような、伝言ダイヤルやパソコン通信といったものも、そのアクセスの容易さから、同様な「傍観者」としてのフレーム操作の楽しみがあると考えられる。

4．電子メディアと匿名のコミュニケーション

以上、一般に電子メディアとよばれるメディアについて、そこで展開している「匿名」のコミュニケーションを見てきたのであるが、前にも述べたように、このような局域行動としての「匿名」のコミュニケーション自体は、必ずしも電子メディアだけで行なわれてきたものではなかった。「不幸の手紙」といった「匿名」の手紙をはじめとして、新聞や雑誌の投書欄、ラジオやテレビ番組への投稿など、マスメディアを通じてこのようなコミュニケーションが行なわれることも多かった。

本稿の立場からすれば、このようなコミュニケーションもまた、局域行動の情報化として、むしろ電子メディアと同様に重要な問題をはらんでおり、電子メディアだけにこうしたコミュニケーションが可能であることは決して主張できないが、ここでは、特に電子メディアの特性がどのような形で以上でみたコミュニケーションと関係しているのかについて検討するとともに、そうした「匿名」のコミュニケーションがなぜこのような場において展開されているのか、について考察する。

4．1．電子メディア特性と匿名のコミュニケーション

（1）同時的な相互性

まず、第一に挙げられる特性としては、コミュニケーション過程における相互作用性の大きさという点である。これは、例えば手紙のやりとりがまさにそうであるように、文字のコミュニケーションにおいても可能であり、電子メールのような電子メディアはむしろこれに近いものと考えられる。しかし、電子メディアの場合、その相互作用性については、同時性というものが基点になっていることが特徴である。

この同時性については、電話やC B無線といったメディアでは当然そのまま見受けられ

るものであるが、伝言ダイヤルやパソコン通信についても、例えば伝言ダイヤルで自発的に時刻を明示することが慣習としてあったように、時間というものがコミュニケーションを規定する面が大きいと考えられる。当然手紙でも、遅れて返事を出すことが失礼であるように、時間は関係してくるが、そのスパンには大きな差がある。たとえタイムラグがあるメディアであっても、そのメディアにおいてやりとりを行なっている間は、相手と時間を共有しているという意識が多く認められる。これはあくまで筆者の観察によるが、例えばパソコン通信フォーラムでは、話題を開始する発信者について「今あるいは今日」何をした、しているという発言が多く認められるが、それは、発信の基準として、発信者の「現在」が非常に短いスパンとしてあり、それにのっとって発言が行なわれているためと考えられる。したがって、最初の発信者においてすでに話題が古い場合、必ずそれについて言及され、もともと基準からずれたような話題は避けられる傾向があるように思われる。また、そのような発信者の「現在」への意識は、逆にコミュニケーション状況における同時性の意識を強めるものであり、そのような時間のずれについて聞いた調査によれば、56%の人が、コンピュータ・コミュニケーション（電子メールも含む）での「時間のずれは気にならない」と答えている（川上ほか，1993）。つまり、意識として、発信者は電子的なコミュニケーション状況においては、それぞれの「現在」を一致させ、共有しながら会話を行なっていると考えられる。

このような意識の成立に、電子メディアのもつ時間と空間の超越性（タイムシフト、スペースシフト）と呼ばれる特性が大きく関わっていることは言うまでもない。そのような形で誰もが「現在」を共有できるということは、実は個人の時間的・空間的な問題に関係なくコミュニケーションの状況が設定できるということによる。電話や無線の場合は、やりとりを行なうものの「現在」はすなわち実際の対面空間におけるその人の現在でもあるが、その他のメディアについては、そうした実際の現在とは関係なく、それぞれがそのコミュニケーション状況における「現在」を共有できる可能性が大きいのである。

以上に見た同時性は、実際には電子化による物理的な時間の短縮による部分が大きく、それ自体のもつ意味はあまりないが、むしろそれによって浮びあがってくる、コミュニケーションの相互性という部分が重要である。それは、前の節でみられたような、相互性を獲得するためのさまざまな方略として確認できる。その意味では、たとえ電子的な文字として「書かれた」ものであっても、それは一つの文書として完結したものであるというよりは、断定をさけた叙述などの例にも明らかなように、意識としてはむしろ対面状況を仮定した形で、相互的な過程に向けられていると考えられる。しかしながら、このような相互性の仮定は、あくまで仮定にすぎず、その誤解がフレミングのような衝突を生じている面も大きい。このようなメディアにおける相互性の獲得がどのように達成されているかについては、対面状況の場合も含めて未知の部分が多く、CB無線で見られたような非対称性の問題も含めて検討する必要がある。しかし、少なくとも現在においては、このようなメディアによる同時的な相互性が可能になっているために、「匿名」の相手であっても、

本稿は所収論文の元となったもので、内容が異なります。参照される場合はご注意ください。

より対面状況に近い相互的なコミュニケーションが可能になっているという事実は確認できる。

(2) 選択性の高さ

次に、コミュニケーション状況における選択性の高さという点が挙げられる。対面の局域のコミュニケーション状況において、人はコミュニケーションの相手の選択から、それが行なわれる時間と空間といったものまで、さまざまな制約を受けている。対面状況においても、こうした制約をある程度コントロールすることは可能であるが、それはしばしば、相手に対する相互作用の儀礼を破ることにもなる。これに対して、電子メディアはこのような制約をとりのぞいた上に、コミュニケーションのあり方を一方または双方にとって有利な形で選択することを可能にする。電子メディアは、相手の選択からはじまり、そこでコミュニケーションの進行の仕方から、さらにコミュニケーションの終了に致るまで、さまざまな形でコントロールの可能性を広げている。さらに重要なのは、このようなメディア上でのコミュニケーションの選択が、単にメディアとして完結するのではなく、その前後に展開する(場合の多い)対面のコミュニケーション状況に対しても、ある種の戦略として組込まれているということである。このような選択によって情報をコントロールしながら、対面状況が進行されている例は、すでにさまざまな電子メディアで行なわれている「ナンパ」のコミュニケーションに明らかであろう。しかしながら、このような例のほかにも、実際に電子メディア状況が対面の状況とどのように関係しながら、人々のコミュニケーションを展開させているか、については、明らかでない部分が多い。少なくともここでは、メディアコミュニケーションがそれ自体で完結している部分は決して大きいものではなく、対面状況を補完する形式で多く用いられることが確認できる。実際に、対面コミュニケーションにおける親密さや、相手への好意的な感情が、メディアコミュニケーションを経由することでさらにポジティブな方向に変化する、といった例が認められている(Rice & Love, 1987; Walther & Burgoon, 1992;)。組織のコミュニケーションについても、電話によって、対面のコミュニケーションが代替されているという見方があったが、実情としては電話はむしろ対面のコミュニケーションを補完する形で利用される方が圧倒的に多かったという例も存在している(Thorngren, 1977)。

またその場合にも、やはり、こうしたコミュニケーションのあり方が文化的な価値体系とどのような関係をもっているかについて、検討する必要がある。「ナンパ」のコミュニケーションについても、男性に有利なようにコミュニケーションの展開がコントロールされている可能性が示唆されたが、このことは、日常生活において特定の「社会的カテゴリー」が選択される過程の問題としても考えられる。「ナンパ」の例で言えば、それは両者の合意の上で結ばれる性的なコミュニケーションであると考えられているが、実際にはコミュニケーションの過程において女性が「性的な対象」として選択的に「カテゴリー化」され、それにのっとる形で「合意」が形成されていると見ることもできる。(テ

本稿は所収論文の元となったもので、内容が異なります。参照される場合はご注意ください。

レクラは、むしろ女性の側では全く性的な意図なしに利用されるケースも多いが、男性の側では少ないとされている。)

(3) 公開性

最後に、コミュニケーション状況に関する公開性の高さというものがある。これは、コミュニケーション状況に対して、原則として誰がアクセスしても自由であることを意味する。その場合、アクセスする主体は、コミュニケーションの直接の参加者であってもよいし、あるいは、コミュニケーションに対する傍観者の立場をとることもできる。しかし、前者の、直接の参加者としてのアクセスは、むしろ前に述べたコミュニケーション状況の選択性に関わる部分が大きく、とりわけ電子メディアについては、後者の傍観者としての立場が重要であると思われる。

この傍観者の立場がもつコミュニケーション上の意味については、先の電話盗聴のところで述べたが、さらに加えていうなら、この部分はむしろマスメディアの多くにも見られてきたことである。テレビは特に「覗き」のメディアとして、その性格をたびたび論じられており(渡辺, 1989 など) むしろ、このような立場はすでに人々の間ではかなり日常化されている経験であろう。

電子メディアで展開している「匿名」のコミュニケーションも、「匿名」の相手とのコミュニケーションであると同時に、その意味では不特定多数のオーディエンスに対するコミュニケーションとしての性格を強く持っていると考えられる。例えばパソコン通信では、実際にフォーラム上でやりとりを活発に行なうRAMと呼ばれる人によって、ROMと呼ばれる傍観者としての人々の立場が、実際によく言及されることがあり、利用者の意識としても、この違いは大きく、時にはその立場をめぐる論争が起こる場合もあるという(細馬, 1991)。したがって、このようなコミュニケーションは、マス・コミュニケーション的な過程をもつということだけでなく、実際にそうしたコミュニケーションを行なっている人々の態度が、日常的なマス・コミュニケーションに関する経験を背景にもっているという、二つの意味で重要になってくる。

このような過程を背景にもつことによって、コミュニケーションの参加者におけるオーディエンスへの意識が高まり、攻撃的な行動が行なわれるという印象操作的な影響については、パソコン通信のところで述べた通りであるが、これは先に触れた伝言ダイヤルの「ケンカダイヤル」のようなものについては、さらに積極的な意味をもつ。この現象について詳しいものの発言によれば、あの罵りあいには「プロレスみたいなもの」で、「観客」を念頭におきながら演じているものであるという(『サンデー毎日』より)。一見あのように激しい罵りあいが「ショー」になるためには、傍観者である人々においても、それを「ショー」として見るだけの、受け手としての読みが必要とされるのであり、そのような読みが、マスコミュニケーションという経験によって培われていることは想像に難くない。

このような経験に加えて、電子メディアにおいては、こうした内容の伝達や複製が個人

本稿は所収論文の元となったもので、内容が異なります。参照される場合はご注意ください。

のレベルにおいて非常に容易であることから、いわゆる「クチコミ」的な情報の展開も存在する。実際に伝言ダイヤル上にはさまざまな「うわさ」が流布するという現象が見られている（櫻村，1989）。このように、電子メディアは、その公開性から、人々のコミュニケーションに関する経験を非常に多様化し、重層的なものへと変化させていると考えられる。

4.2. 匿名のコミュニケーションの意義とその可能性

以上の考察を経たところで、最後に、こうした電子メディア上で展開する「匿名」のコミュニケーションが、なぜ行なわれ、今後どのような可能性を見せるのか、を問うことになる。しかしながら、以上に示したように、今後の検討に任される部分も多く、ここでは、仮説的にその意義について論じながら、その可能性について簡単に論じるにとどめる。

以上の考察でまず確認されたことは、繰り返しになるが、これらのメディアコミュニケーションに、対面状況の補完的な意味が依然として大きいということである。これは、われわれがまだこのような情報化の状況に適応しきれず、対面の経験をとりあえず応用しているに過ぎないと見ることもできるかもしれないが、それよりは、再三指摘したように、それらのコミュニケーションにおいてもあくまで、当事者の「フェイス」が守られているということに積極的な意味が見い出せるのではないだろうか。

むしろ、人々は相手の「フェイス」を守り、「人」として尊重するということのために、電子メディア・情報化という状況を用いていると考えられる。ゴッフマンはこうした相手の「フェイス」を守ることが、半ば宗教的な儀式として行動に表わされていることを示して、このような行動をまさに「儀礼」と呼んでいる（Goffman, 1967）が、このような行動は情報化時代によって衰退するどころか、逆に情報化によって拡大されている部分が多いと考えられる。むしろ、身体的な関わりが表面化する対面コミュニケーションは必ずしもこのような行動を遂行するのに、完全にふさわしい手段であるとは言いにくい。なぜなら、「われわれは、話はやめることができても、身体表現によるコミュニケーションはやめることはできない。身体表現では、正しくてもまちがっていても、とにかく何かを伝達する。そこでは何も伝達しないということとはできない」（Goffman, 1963b, p. 39）からである。このようなコミュニケーションのコントロールの手段としてメディアが存在し、人々がそのコントロールの可能性に対し、より積極的になってくる過程が、まさに情報化の一局面として展開しているのである。

「匿名」のコミュニケーションは、このような「フェイス」の維持における接近と回避のバランスがもっとも微妙なコントロールを必要とする。そのために、まず「匿名」という状況でこのようなメディアを使った自動化が行なわれていると見ることもできるであろう。そう考えるとすれば、今後、「フェイス」のもつ意味が重要でない文化的領域にも、情報化によって「フェイス」の信仰が進み、日本社会のように従来コミュニケーション状況における「フェイス」の維持が肝要であるとされる社会（例えば、笹川，1994 など）にお

本稿は所収論文の元となったもので、内容が異なります。参照される場合はご注意ください。

いては、このようなメディアによる「フェイス」の操作がよりニーズを拡大すると考えられる。

このような深層のレベルを別にしても、実際の動きとして、人々の接近と回避に関するジレンマは現状においても大きく拡大しつつある。本稿の冒頭で社会の「ネットワーク化」の動きについて述べたが、このような形での「匿名」の人との出会う機会と、そうした「接近」に関するニーズは、今後さらに深まっていくものと考えられる。

しかし、それと同時に、特に若い年代層の間で、コミュニケーションにおける「回避」に関する問題は、人々の間で非常に大きなものに変化している。例えば、橋本良明は現代の若者にRAMパーソナリティというものが存在し、深い対人関係を拒否し、いつでも好きなときにアクセスできるような関係を好む傾向があることを指摘しており、このような傾向とメディア利用の間に相関があることを実証している（橋本，1992）。また、筆者自身の調査でも、直接にメディアを介在させるのとは別に、対人コミュニケーションの環境としてメディアを利用する傾向と、対人コミュニケーションに対する意識の関係をみたところ、深い関係を忌避し、表層だけでの同調に執着する「表層型」のコミュニケーション意識をもつものは、それだけメディアを環境的に利用する傾向があることが実証された（是永，1993）。このように、メディアの利用とコミュニケーションにおける「回避」の問題が、しだいに結びつきを深めているのが、現在に見られる情報化のもつ可能性であろう。また、そのような「回避」の結果として、人々のコミュニケーション状況において、特定の「社会的カテゴリー」がひとり歩きする可能性にも今後注意する必要があると考えられる。

注

1)これ以降の「個人的アイデンティティ」という用語の使い方は、実際のゴッフマンの用語と異なっており、ここでは、コミュニケーションの場面において、自己によって同定されている社会的アイデンティティの意味合いが強い。彼に従えば、厳密には前者は「即時的社会的アイデンティティ」(an actual social identity)であり、後者は「対他的社会的アイデンティティ」(a virtual social identity)と呼ぶべきであろう。これ以前に示したように、ゴッフマンはむしろ個人における情報（表象）のユニークさや、それらの構造の単一性を強調して、それらに関して個人に同定される情報を「個人的アイデンティティ」と呼んでいる。しかし、本論の文脈では、個人内部での情報のあり方よりも、そのような情報の質的な乖離、すなわち対他的社会的アイデンティティの「一人歩き」が問題なのであり、その問題意識だけを引き継ぐことだけがとりあえずの関心なので、概念の理解しやすさだけを考え、両者をあえて「混同」して用いている。「生活誌」という概念についても同様の「混同」がある。

2)フェイスというものは、一定の地位だけではなく、むしろ状況に即して形成されるものである。「父」としてのフェイスや「上司」としてのフェイスがあるように、「正直もの」

本稿は所収論文の元となったもので、内容が異なります。参照される場合はご注意ください。

としてのフェイスや、そして「市民的な自己」としてのフェイスがある。

3)この二種類のフェイスワークが、一つのコミュニケーション方略として概念化されたものが、ブラウンとレビンソンによる誠実性戦略 (Politeness strategy) の、消極的な方略と積極的な方略である (3 . 2 . 参照)。

4)「遊び」や真面目といった意味をとり払い、匿名でのコミュニケーションを、あくまで一つの状況を維持するための戦略ゲームとして捕えるならば、その意味では「社交性」は十分な関連をもつ。(Goffman , 1961=1985) 先の満員電車の例で、「お互いの社会的地位を非関連化する」ということは、一種の「社交性」を成立させていることになる。

本稿は所収論文の元となったもので、内容が異なります。参照される場合はご注意下さい。

参考文献

- Carnevale, P.J.D., Pruitt, D.G. and Seilheimer, S.D., 1981, "Looking and competing: Accountability and visual cues in integrative bargaining", *Journal of Personality and Social Psychology*, 40(1), pp.111-120
- Dannefer, D. and Kasen, J.H., 1981, "Anonymous Exchanges: CB and the emergence of sex typing", *Urban Life* 10(3):265-287
- Dannefer, D.W. and Poushinsky, N., 1979, "The C.B. Phenomenon: A sociological Appraisal", *Journal of Popular Culture* 12(4):611-619
- Diener, E., 1980, "Deindividuation: The Absence of Self-Awareness and Self-Regulation in Group Members", in Paulus, P.B. (ed.) *Psychology of Group Influence*, Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates., pp.209-242
- Felson, R.B., 1982, "Impression Management and the Escalation of Aggression and Violence", *Social Psychological Quarterly* 45(4), pp.254-262
- Festinger, L., Pepitone, A. and Newcomb, T., 1952, "Some consequences of deindividuation in a group", *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 47, pp.387-389
- Goffman, E., 1963a, *Behavior in Public Places*, New York: Free Press=1980 丸木恵祐、本名信行訳『集りの構造』, 誠信書房
- Goffman, E., 1963b, *Stigma: Notes on the management of spoiled identity.*, Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Goffman, E., 1967, *Interactional Ritual: Essays on Face-to-Face Behavior.*, New York: Doubleday Anchor. (邦訳 広瀬英彦他, 1986, 『儀礼としての相互行為: 対面行動の社会学』, 法政大学出版会)
- Goffman, E., 1971, *Relations in Public: Microstudies of the public order.*, New York: Basic Books.
- Goffman, E., 1974, *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*, Boston: Northeastern University Press
- Goffman, E., 1981, *Forms of Talk.*, Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press.
- 橋元良明, 1992, 「「電腦社会」のRAM人間」, アクロス編集室編『ポップ・コミュニケーション全書』, PARCO出版, pp.90-109
- Himestra, G., 1982, "Teleconferencing, concern for face and organization culture", *Communication Yearbook* 6, pp.874-904.
- 堀部 政男, 1992, 「迷惑電話をめぐる法的課題」(上・下), 『ジュリスト』 No.977, pp.31-36, No.988, pp.73-81.
- 細馬宏通, 1991, 「電子コミュニティのトラブル: コミュニケーションの二重構造をめく

本稿は所収論文の元となったもので、内容が異なります。参照される場合はご注意ください。

- る論争」,川上善郎ほか『電子コミュニティと人間関係』,コンピュータ・コミュニケーション研究会,pp.97-108.
- 池田謙一,1990,「ニューメディアの利用と満足」,竹内郁郎ほか編『ニューメディアと社会生活』,pp.141-166.
- 今井賢一・金子郁容,1988,『ネットワーク組織論』,岩波書店
- 金子郁容,1986,『ネットワークへの招待』,中公新書
- 櫻村政則編,1989,『「伝言ダイヤル」の魔力:電話狂時代をレポートする!』,JICC出版局
- 川上善郎・川浦康至・池田謙一・古川良治,1993,『電子ネットワークの社会心理:コンピュータ・コミュニケーションへのパスポート』,誠信書房.
- 川浦康至,1990,「コミュニケーション・メディアの効果」,大坊郁夫ほか編,『人と人を結ぶとき』(社会心理学パースペクティブ・2),pp.67-88.
- Kerbo,H.R.,Marshall,K. and Holley,P.,1978, " Reestablishing Gemeinshcaft?:An examination of the CB radio fad",Urban Life, 7(3),pp.337-358.
- Kiesler,S.,Siegel,J.,and McGuire,T.W.,1984, " Social psychological aspects of computer-mediated communication",American Psychologist, 39(10),pp.1123-1134.
- Kiesler,S., Siegel,J.,and McGuire,T.W.,1984, " Social psychological aspects of computer-mediated communication",American Psychologist,39(10),pp.1123-1134.
- Kogan,N. and Wallach,M.A.,1967, " Risky-shift phenomenon in small decision-making groups.:A test of the information-exchange hypothesis.",Journal of Experimental Social Psychology,3 ,pp,75-84.
- 是永 論,1993,「電子メディアと生活状況:多元的なメディア状況によるリアリティの変容」,『マス・コミュニケーション研究』,42 , pp.163-178.
- Lady(野戸美江) and Stranger(本田成親),1993,『電子ネット・ワールド:パソコン通信の光と影』,新曜社
- Lea,M.,O'Sher,Tim,Fung,P. and Spears,R.,1992, "' Flaming' in computer-mediated communication, in M.Lea,(ed.) Contexts of Computer-Mediated Communication. New York:Harvester Wheatsheaf,pp.89-112.
- Lindskold,S.and Propst,R.L.,1981, " Deindividuation,self-Awareness,and impression Management",in J.Tedeschi(ed.),Impression Management Theory and Social Psychological Research, New York:Academic Press,pp.201-221.
- McGuire,T.W.,Kiesler,S. and Siegel,J.,1987, " Group and computer-mediated discussion effects in risk-decision making",Journal of Personality and Social Psychology,52(5),pp.917-930.
- Milgram,S.,1970, " The experience of living in cities:A psychological analysis " ,Science 167-13,pp.1461-1468.

本稿は所収論文の元となったもので、内容が異なります。参照される場合はご注意ください。

- 宮台真司・石原英樹・大塚明子,1993,『サブカルチャー神話解体：少女・音楽・マンガ・性の30年とコミュニケーションの現在』,PARCO出版
- 森岡正博,1993,『意識通信：ドリーム・ナビゲーターの誕生』,筑摩書房
- 永井良和,1986,「都市の「匿名性」と逸脱行動：隠蔽と発見の可能性」,『ソシオロジ』30(30),pp.77-96.
- 西阪 仰,1992,「エスノメソドロジストは、どういうわけで会話分析を行なうようになったのか」,好井裕明編『エスノメソドロジーの現在』,世界思想社,pp.23-45.
- 小川博司,1979,「非名・没名・無名」,『ソシオロギス』No.3,pp.82-97.
- 岡田朋之,1993,「伝言ダイヤルという疑似空間」,『現代のエスプリ』No.306,pp.93-101.
- Reicher,S.D.,1984, "Social Influence in the crowd:Attitudinal and behavioural effects of de-individuation in conditions of high and low group salience",*British Journal of Social Psychology*, 23,pp.340-350.
- Rice,R.E.,1990, "Compuer-mediated communication system network data:Theoretical concerns and empirical examples",*International Journal of Man-Machine Studies*,No.30,pp.1-21.
- Rice,R.E.and Love,Gail,1987, "Electronic emotion :Socioemotional content in a computer-mediated communication network",*Communication Research* 14(1),pp.85-108.
- Rutter,D.R.,Stephenson,G.M. and Dewey,M.E.,1981, "Visual communication and the content and style of conversation",*British Journal of social Psychology*,No.20,pp.pp41-52.
- 笹川 洋子,1994,「発語媒介行為の再考：日本人のコミュニケーションにおける発語媒介行為の意味」,『マス・コミュニケーション研究』,No.44,pp.58-71.
- 佐藤慶幸編,1988,『女性たちの生活ネットワーク：生活クラブに集う人々』,文眞堂
- Schegloff,E.A.,1977, "Identification and recognition in interactional openings",in Pool,I.(ed.),*The Social Impact of the Telephone*,The MIT Press,pp.415-449
- Schegloff,E.A.and Sacks,H.,1972, "Opening up closings",*Semiotica*,7,,pp.289-327 (邦訳 北澤裕・西阪仰,1989,『日常性の解剖学：知と会話』,マルジュ社,pp.172-241.
- Siegel,J., Dubrovsky,V., Kiesler,S. and McGuire,T.W.,1986, "Group processes in computer mediated communication",*Organizational Behavior and Human Decision Processes*,No.37,pp.157-187.
- Spears,R. and Lea,M.,1992, "Social Influence and the influence of 'social' in computer-mediated communication",in Lea,Martin(ed.) *Contexts of Computer-Mediated Communication*,New York:Harvester Wheatsheaf.,pp.30-65.
- Spears,R.,Lea,M. and Lee,S,1990, "De-individuation and group polarization in computer-mediated communication",*British Journal of Social Psychology*

本稿は所収論文の元となったもので、内容が異なります。参照される場合はご注意ください。

29, pp. 121-134.

Sproull, L. and Kiesler, S., 1986, "Reducing Social Context Cues: Electronic mail in organizational communication", *Management Science* 32(11), pp. 1492-1512.

Sproull, L. and Kiesler, S., 1991, *Connections: New ways of working in the networked organization*, The MIT Press.

高本条治, 1993, 「パソコン通信におけるフェイスマークの機能」, 『日本語学』第12巻第13号, pp. 63-74

宝島編集部 (編), 1994, 『誰も語らなかった密やかなテレクラ・ブーム』, 宝島社

Thorngren, B., 1977, Silent actors: communication networks for development, in Pool, I. (ed.), *The Social Impact of the Telephone*, The MIT Press, pp. 374-385.

薄井 明, 1991, 「市民的自己をめぐる攻防: ゴフマンの無礼・不作法論の展開」, 安川一 (編) 『ゴフマン世界の再構成: 共在の技法と秩序』, pp. 157-184.

Walther, J.B., 1992, "Interpersonal effects in computer-mediated interaction: A relational perspective", *Communication Research* 19(1), pp. 52-90.

Walther, J.B. and Burgoon, J.K., 1992, "Relational communication in computer-mediated interaction", *Human Communication Research* 19(1), pp. 50-88.

渡辺 潤, 1989, 『メディアのミクロ社会学』, 筑摩書房

安川 一, 1991, 「共在というボルノグラフィー: 公共場面のジェンダー構造」, 安川一 (編) 『ゴフマン世界の再構成: 共在の技法と秩序』, pp. 185-210.

安川 一, 1994, 「マンガの語られ方: "ヴィジュアル" をめぐる困惑」, 林 進 (編) 『メディア社会の現在』, pp. 93-109.

吉見 俊哉, 1992, 「メディア変容と電子の文化」, 『思想』1992年7号, pp. 16-30.

吉見 俊哉, 1988, 『都市のドラマトウルギー』, 弘文堂.

吉見俊哉・若林幹夫・水越伸, 1992, 『メディアとしての電話』, 弘文堂.

郵政省, 1993, 『通信白書 平成4年度版』, 大蔵省印刷局.

Zimbardo, P.G., 1970, "The human choice: Individuation, reason, and order versus deindividuation, impulse and chaos", in W.J. Arnold and D. Levine (eds.), *Nebraska Symposium on Motivation*, Vol. 17, University of Nebraska Press.